特別高等警察女学生淫虐鬼畜拷問

赤い冊子と白い薔薇

濠門長恭

目次

登場人物……3
一．序章……5
・眼前の逮捕劇……5
・桃色の白薔薇……10
・赤い本の誘い……17
二．逮捕……24
・校門前の摘発……24
・四人の贄少女……32
・残虐非道の責……48
・勾留初日の夜……76
三．拷問……87
・下心ある尋問……87
・尋問の下準備……98
・拷問の始まり……112
・飴と鞭の失敗……126
・緊縛の屈曲位……140
・肛姦と口姦と……148
・飢餓拷問の酷……172

・口肛連結の惨……178
・勘当と義絶と……193
・命脅かす拷問……200
・束の間の休息……225
四．入替……229
・女教師の尋問……229
・被虐に酔う女……253
・三連ワイヤー……262
・睦み合う二人……265
・恵を庇うユリ……276
・地獄への心中……290
五．転向……300
・悦虐への入口……300
・突然の解放劇……320
・女教師の告白……326
・生餌を求めて……333
後書き……336

登場人物

石山　ユリ
四月に赴任した英語臨時教員。資産家の屋敷に下宿している。

瀬田　恵（白薔薇聖女学院三年生）
瀬田家の推定家督相続人。自分の娘に入婿相続させたい後妻に疎まれている。

山崎　華江（白薔薇聖女学院五年生）
縁談をことごとく断わり、卒業後は職業婦人を目指している。婦人参政権運動などにも参加している。

河瀬　弓子（白薔薇聖女学院五年生）
婚約者に召集令状が来たとき「人を殺すなんて野蛮なことは、なさらないで」と言ったのが特高警察に探知された。

稲枝　紗良（白薔薇聖女学院中退）
伊太利人神父と日本人妻との間にできた娘。父親の血が濃い。ミサで父親が反戦を説いて逮捕され、紗良は四年生に新旧後退学処分に。父の国外追放後に母子も逮捕される。母は起訴されて有罪となり、服役中。

荒島警視　県警察の特高課長
古武術研究会には距離を置いている。
青谷警部　文官高等試験合格組
瀬田恵の主任取調官。サドっ気は薄い。
乃木警部　文官高等試験合格組
山崎華江の主任取調官。じゃじゃ馬馴らしも面白かろうと、張り切っている。
大岩警部補
河瀬弓子の主任取調官。特高課に配属されたことを嫁方の実家に忌避されて離婚されている。
浜村警部
古武術研究会の賛助会員。特高課においては、特殊な拷問や緊縛の先導者。
泊巡査部長
父親が古武術研究会の御用達職人。その伝手で婦女子思想犯取調係に抜擢された。
浅利巡査部長
女絡みで問題を繰り返して警部補から降格。女を誑かす腕はピカイチ。

※古武術研究会
明治末期から離合集散を繰り返してきた、（女囚に対する）捕縄術と拷問術の研究会。
拙著『大正弄瞞』および『寒中座禅（転がし）修行』を参照。

一・序章

・眼前の逮捕劇

午前の教科の終業を告げる鐘の音が鳴り終わって五分もすると、白薔薇聖女学院の校門から白いセーラー服姿の乙女たちが続々と吐き出され始める。三人四人、十人ちかい集団もあった。初夏の明るい日差しの中で、乙女たちは清らかに輝いている。

不意に物陰から二人の男が姿を現わして、ひとりの女学生の行く手を遮った。それだけでもじゅうぶんに不審な行動なのに、男たちは開襟シャツに鳥打帽というヤクザな服装をしていた。

女学生は立ち止まって、気丈にも相手を睨み据えた。その目の前に黒い手帳がかざされた。

「特別高等警察の者だ。山崎華江（やまざきはなえ）だな。非合法のメーデー集会に参加して庶民に暴力をふるった容疑で逮捕する」

その言葉を聞いたとたん、まわりにいた女学生たちのほとんどは蜘蛛の子を散らすように逃げ去った。気骨のある何人かは、遠巻きにして無言の抗議を眼差しにこめている。

「あれは、そんな集会ではありません。男の人たちが絡んできたから……」

「申し開きは署でしてもらおうか」
二人のうち若いほうの男が華江の背後にまわって、腕をねじ上げた。
「痛い！　やめてください。来いと言うなら行きます。そんな……いやあ、縛らないでください」
肩の高さまでねじ上げられた手首に捕縄が巻かれて、首にまわされる。
校長と数人の教師が、大慌てで駆けつけた。その中に紅一点、今学期から英語の臨時教員を務めている石山（いしやま）ユリが混じっていた。
「校門の前で、狼藉にもほどがありますぞ」
男たちを叱りつけた校長だったが、黒革に金文字の警察手帳を見せつけられては沈黙せざるを得なかった。
「この生徒が、いったい何をしたというのです」
華江の前に立ちはだかっている年配の男が、説明を繰り返す。
「違います。自分たちは婦人参政権を要求して、公演で小さな集会を開いていただけです」
「なんと、デモに参加したとは。そうとなれば、逮捕も致し方のないことでしょうな」
校長は華江の訴えをわざと曲解したような言い方をした。
「しかし、制服姿で縛るのだけは勘弁してやってください。我が校の評判が地に落ちます」
校長の頭には、学院の名誉を護ることしかない。二人の男性教師はもとより、ユリさえも女生徒をかばおうとはしなかった。かばったところで、あらぬ嫌疑を掛けられて一緒にしょっ引かれるだけなのはわかりきっているとしても。
「ふむ。先生のおっしゃることも、もっともだ。泊クン、いったん縄をほどいてやりなさ

い」
ほとんど一瞬で、縄がパラリとほどけた。
「制服を着ていてはいかんそうだ」
年輩の男がセーラー服の襟を両手でつかんで、左右に引き裂いた。
「いやあああっ……！」
華江が胸元を両手でかばってしゃがみ込んだ。
「抵抗するなッ」
男が華江を組み敷いて、セーラー服を引き千切ってしまった。さらに、スカートも脱がせる。華江は足をばたつかせて逆らったが、かえって男の手を助けたようなものだった。
公衆――というよりも、見知った顔の面前で半裸にされて、華江は羞恥に打ちのめされ、身体を丸めている。しかし男は、激しく華江を揺すぶった。
「この期に及んで抵抗するかッ」
取り押さえると見せかけてシュミーズを破り、乳バンドも肩紐を千切り背中のホックまではずした。そうしておいて、背後にねじ上げた手首を扼し、首に縄をまわしてから二の腕までも縛った。
「立て」
男みたいに裾を刈り上げたお河童を鷲掴みにして、男は華江を引きずり起こした。
華江の裸身は土にまみれて、一人前の女に性熟する寸前の乳房は擦り傷から血がにじんでいる。
「ひどい……なぜに、こんな辱めを受けねばならないのです。男女同権は、そんなにいけ

ないことなのですか」
華江は涙の滲む目で男を睨んだが、男は薄く嘲笑うだけ。若いほうの男が、華江に腰縄を打った。
「これなら女学生とさえもわからんから、文句はないでしょうな」
「う、うむう……お役目、ご苦労様です」
年輩の男に気圧されて、校長はへつらうことしかできない。
「そら、歩け」
若い男に腰縄を引かれて、華江がよろよろと足を踏み出す。
「とっとと歩かんか。まだ物足りんなら、こいつも脱がせるぞ」
後ろからズロースの腰回りを引っ張られて、華江が「ひぐっ」と息を呑む。パチンとゴムに腰を叩かれると、背後の男から逃れようとして足を速めた。
目をそむけながらも遠巻きにしている女学生たちからさらに離れて、脇道への曲がり角に身を隠すようにして、瀬田恵（めぐみ）は事件の一部始終を目撃していた。特高警察への反発ではなく、華江と面識があるわけでもない。恐ろしさに足がすくんでいるだけだった。華江がこちらへ追い立てられるのを見て、ますます足がすくむ。間近に眺めたりしたら怒られるのではないかと思っても、膝頭が笑って、立っているのがやっとだった。
不意に肩を叩かれて、恵は悲鳴をあげた。
「ひゃあっ……」
そのまま脇道へ引きずり込まれた。
「ここにいたら、面倒に巻き込まれかねないわ。行きましょう」

ユリの声だった。曲がり角から顔を覗かせている恵に気づいて、様子を見に来てくれたのだろう。

「あああ……ユリお姉様あ」

ほかの生徒の目も忘れて、恵は女教師に抱きついた。ユリは路地裏の塀と塀との間に教え子を引き込んで、きつく抱きしめた。そうして、顔をかぶせて唇を重ねた。

尊敬し憧れ深く愛している女性にきつく抱擁されて、恵はようやくに人心地を取り戻した。口の中で蠢く軟らかな肉塊に自分の舌をぎこちなく絡めた。たった今目撃した光景を悪夢とするなら、これは幸せに満ちた夢だった。二週間前に呼び出されて、唐突に告白されて始まった甘美な夢は、だんだんと激しく濃密になりながら、今も続いている。

「今日は時間があるのでしょう。おうちへいらっしゃい」

恵はユリの腕の中でコクンとうなずいた。

路地裏伝いに別の道に出ると、生徒の中では恵だけが見慣れている乗用車が停まっていた。遠縁の資産家の邸宅に下宿しているユリは、運転手付きの自家用車で送迎してもらっているのだった。さすがに校門まで乗り付けるような愚は犯さず、通学路とは筋の違う道で降りて百メートルほどは歩いている。

「ほんとうに、恐かったわね」

書生めいた雰囲気の若い運転手の目をはばかって、ユリと恵は後部座席におとなしく座っているが、ユリの手は恵の太腿をスカートの上から撫でている。そうされていると、白昼夢のような逮捕劇の衝撃が次第に薄れて――腰の奥がじんわりと熱く潤ってくる。

・桃色の白薔薇

洋風のモダンな鉄柵で囲われた敷地に足を踏み入れたのは、今日が三回目だった。それでも、邸宅の大きさには圧倒されてしまう。瀬田の家もモダンなコンクリート造二階建てなのだが、クリスマスケーキとショートケーキくらいの差があった。

最初に訪れたのはちょうど二週間前。

さすがに部屋の広さは恵に与えられている部屋の倍くらいしかなかったが、全身を映せる姿見や化粧台やベッドなど、西欧のお姫様の居室さながらだった。机だけは恵よりも小さかったが、白く塗られて装飾まで施されていた。

豪奢な調度に圧倒されている恵をベッドの縁に腰掛けさせて、ユリはその肩を抱いた。

「あなたはお父様とも後添えのお母様とも不仲と聞きました。わたしで力になれることがあったら、なんでも言ってくださいね」

臨時教員として赴任して二か月と経っていないのに、ユリは生徒全員の事情に通じているようだった。

ユリ先生は、学院でいちばん若い。といっても十歳の差は大きいのだが、それでも――この先生なら、父母の恩は山よりも高く海よりも深いなんて紋切り型のお説教ではなく、自分の悩みを真剣に聞いてくれるのではないかしら。そう信じて、恵は心の底に沈潜させていた思いの丈を打ち明けたのだった。

齟齬のすべては、母の一周忌が明けると同時に父が君代という女を後妻に迎えたことに始まる。潔癖な少女にとっては、それだけでもじゅうぶんに父を疎む理由になるのだが。恵と二つ違いの義妹が父の血を引いている――母と結婚して数年で、その女を妾にしていたという事実は断じて許しがたかった。そして継母とさえ恵は思っていない父の後妻は、どういう伝手を頼ったのか、それなりに魅力的な恵の縁談を二度も持ち込んでいる。家柄も本人の人品も申し分なかったが、どちらも長男だった。ひとり娘だった恵は、入り婿をとって瀬田家を継ぐ立場にある。それが長男に嫁げば他家の嫁になってしまい、瀬田家は義妹が継ぐことになる。恵の感覚では、賤しい妾に家を乗っ取られるに等しい。

そういったことを縷々述べるうちに感情が高ぶって――気がつけば、ユリに口を吸われていた。生まれて初めての接吻だった。

「この家の使用人は、とても礼儀正しいのよ。わたしが声を掛けるまでは、けっして部屋に近づきもしないの」

ユリがそう言ったとき、彼女の指は恵のズロースをまさぐっていた。

「いけません。やめてください」

恵はユリの手を押さえたが、払いのけたりはしなかった。性的な戯れに興味があったとかいうのではなく――たとえ歳が近いとはいえ、相手は教師だった。生徒が教師に逆らうなんて、許されざることだった。

戸惑っているうちに、指はズロースの上から割れ目を上へなぞっていき……

「ひゃんんっ……！」

股間の一点から甘美な稲妻が奔った。それだけで腰が砕けた。

「なにをなさったんですか……ひゃんっ！」
立て続けに稲妻に貫かれて、恵はなにも考えられなくなっていた。そして気づいたときには、二人は裸で絡み合っていた。いや、恵はユリに寝台の上で抱かれて股間を激しく優しくしごかれていた。豊満な乳房とささやかな乳房とが押しくらまんじゅうをしていた。乳首からも淡い稲妻が散って、股間の稲妻とひとつになって恵の全身を駆け巡る。
「あああああっ……浮かんでる。落ちる……落ちちゃう」
恵は宙に漂いながら、これまでに感じたことのない不思議な感覚に包まれていた。冬に布団の中で微睡んでいる心地良さとも、激しい運動で疲れ果てた後の脱力とも、素敵な音楽に包まれる感動とも、真夏の暑い日に海に浸かる全身の清涼感とも――すべての心地良い感覚とはまったく異なる、言葉で表わすなら純粋の快感だった。あえていうなら、我慢し続けていた小水を迸らせるときの快感に、すこしだけ似ていたかもしれない。
「あああああ……いけません。こんな、ふしだらなこと……」
かろうじて心の片隅に引っ掛かっている理性が、弱々しく警鐘を鳴らす。
「それは、男と女の交わりのことよ。女同士、なにをどうしても淫らがましいことはないのよ」
その言葉に反駁するだけの知恵はそなわっていなかったし、恵の身体はユリの愛撫を十全に受け容れていた。
恵はいっそう宙高く浮揚して。生まれて初めての性的な絶頂に達したのだった。
――週が明けて。月曜と火曜は、いつも通りの学園生活が過ぎた。ユリの授業も、週末の出来事は夢だったのかと思うくらい、淡々としていた。

けれど、水曜日の放課後には個室に呼び出された。質の高い授業を維持するために、日常も教員が自己研鑽に励めるよう、臨時教員にまで個室があてがわれている。もっとも、生徒であろうと教師であろうと、二人以上が同室する場合には扉をすこし開けておくなど、不祥事を起こさないための決まりは幾つかあった。

薄く開けた扉を背中でふさぐようにして、ユリは恵を抱き締めて口を吸った。

「ごめんなさいね。土曜日のことが本当にあったことだったのか、夢ではなかったのか、どうしても確かめたかったの」

あたしと同じくらい、もしかしたらそれ以上に、先生もあたしのことを想ってくださっている。その想いが熱く胸に刻まれた。

「先生……」

「ふたりきりのときは、ユリって呼んで」

「そんな不遜なこと……そうだ、ユリお姉様って呼ばせてもらっていいですか？」

「ええ、もちろんよ」

土曜日には肉の交わりを持ったけれど、今日は魂と魂とが結ばれた。その想いだけで、恵は軽く宙に漂ったのだった。

――その週の土曜日にも、恵は邸宅に招かれた。今度は一方的に愛撫されるだけでなく、ユリの求めに応じておずおずと相手の股間に指を這わせて――ついには、互いに淫蕾を舌で愛撫することまで仕込まれた。

「これ……お灸の痕なんですか？」

黒々とした淫叢に覆われた左右の丘に三つずつの黒い小さなくぼみを見つけて、恵は無

邪気に尋ねた。
「そんなところかしら」
「先生のご両親も厳しいお方だったんですね」
小さなころに、たぶん母親からおねしょ封じにお灸を据えられたのだろう。それくらいしか、蕾の連想ははたらかなかった。
「そうじゃなくて……すごく熱いけれど、そのぶん快感もすさまじいのよ」
「……？」
肩凝りや腰痛に効くのだから、敏感な部分に据えたらそうなるのかな。恵は、自分の知識の範囲でそんなふうに考えた。いくら気持ち良くなるからといって、自分で試してみようとは絶対に思わなかったけれど。
お灸の痕に舌を這わせると、ユリはビクンビクンと腰を振るわせた。そうか、そんなにいいんだと、蕾はユリの言葉を信じ込んだのだった。
自分にも同じ器官がついているとはいえ、恵には女性器は理解に余る存在だった。さわってはいけない、他人に見せてはいけない――と、そこは不可触領域だったのだ。割れ目の頂点に、信じがたいほど敏感で、ちょっとくすぐられただけで甘い稲妻が腰を貫く蕾が隠れていたなんて、ユリに教えられるまで知らなかったくらいだ。
だから、知り初めた快感に悶えながらも、好奇心も手伝ってさまざまな愛撫を受け容れ、あとで冷静になってみると顔が火照ってくるような行為もユリに命じられるままに実行してしまう。

そして、今日。三回目の訪問は、しかしこれまでとは様相が異なっていた。目の前で上級生が逮捕されて、しかも半裸で捕縛されて引っ立てられたなどという驚天動地の出来事の後で、淫らがましい気分になれるはずもなかった。淫らがましい――男女の営みではなくても、肉の交わりを伴なう性愛というものがあるのだと、恵は本能的に察している。この一点に関しては、恵はユリの言葉を信用していなかった。「女同士、なにをどうしても淫らがましいことはないのよ」それは、後ろめたさへの言い訳だと思う。その後ろめたさが、蜜の味をいっそう濃厚にしてくれるのだと、それもおぼろに理解していた。

「ほんとうに……官憲の非道さには怒髪天を衝く思いね」

女性にしては凛々しいと思える物言いも少なくないユリだが、これは悲憤慷慨だった。

「しかも、わざと女性を辱めるような仕打ち。婦人参政権を願う山崎さんの思いは、当然のことだわ」

「先生……？」

「恵は、そう思わないの？」

いつにない激した様子に、恵は戸惑っている。

「それは……わざと服を破るなんて、非道すぎると思いますけど。法律で禁じられていることをした先輩にも、非はあったんじゃないでしょうか」

「違う！」

叱りつける口調だった。

ユリは小さな本棚の奥を探って、薄っぺらい冊子を取り出した。ガリ版刷りの手作りらしい。題名も書かれていないのっぺらぼうの表紙だが、ずいぶん読み込んでいるらしく、

小さな栞がいくつも挟み込まれていた。
「これを差し上げるから……落ち着いてから読んでごらんなさい。ブルジョワジーの手先たる官憲の横暴さが、よくわかるから」
「……？」
恵は押し付けられた冊子を胸に抱いた。経緯はどうあれ、お姉様からいただいた初めての贈り物だった。きな臭いにおいは感じたけれど、断わるなんてできっこなかった。
なんとなく気まずくなって、並んでベッドに腰掛けたまま、おしゃべりもしないで三十分ほどを過ごしただけで、恵は辞去をうながされた。
「今日は、源田様が早くお帰りになるかもしれないから」
源田というのは、この邸宅の持ち主だ。幅広く貿易などの仕事をしているとしか、恵は聞かされていない。けれど、遠戚のユリに広い部屋をあてがって、学校までの送り迎えを使用人にさせているのだから、ずいぶん裕福なんだろうと思っている。
恵がブルジョワジーという言葉の意味をきちんと知っていれば、その典型たる人物の世話になっているユリに矛盾を感じたかもしれないが――主義に走る青年の多くは裕福な家庭の子息なのだから、いずれにせよ恋心に水を差されたりはしなかっただろう。
「明日は午後から源田様がお出かけだから。もしよければ、その本の感想でも聞かせてくださる？」
「はい。必ずうかがいます」
追い出されるのではないと、はっきりして、そのほうがずっと大切なことだった。

・赤い本の誘い

家に帰りつくと、継母に挨拶なんかせずに自分の部屋に引きこもって、恵はいただいた冊子をひもといてみた。

一個の怪物がヨーロッパを徘徊してゐる。すなはち共産主義の怪物である。古いヨーロッパのあらゆる權力は、この怪物を退治するために、神聖同盟を結んでゐる。ローマ法皇もツァールも、メッテルニヒもギゾウも、フランスの急進黨もドイツの探偵も。

恵は冊子を閉じた。まるきり意味がわからなかった。ただ、共産主義という恐ろしい文字だけが印象に残った。

ユリ先生は主義者なのかしら。違うんじゃないかとも思った。だって、冊子は共産主義を『怪物』ときめつけている。

栞のうちのひとつだけが赤い。そこを開けてみた。

ブルジョアは自分の妻を單なる生産器具と考へてゐる。そして生産器具がみな共同に利用されると聞いたのだから、その共同利用の運命が、やはり婦人の上にも來るものとしか考へられないのは、無理もない話である。

共産主義者の目的とするところは、さういふ單なる生産器具としての婦人の地位を、

廃絶しようとするにあるのだなどとは、彼らが思ひもそめないことである。
やっぱり、よくわからないけれど。妻を道具と考えてはいけないという意味らしい。それが共産主義の主張だとしたら、婦人参政権運動とあまり違わないのではないだろうか。でも、そういった世の中を、内乱や暴動で実現しようとするのは、やはり間違っている。
恵は、考えるのをやめた。ユリお姉様がこんなにも愛読された御本なのだから。間違ったことは書かれていないに決まっている。
――翌日は、約束通りにユリとの逢瀬を重ねた。もはや、訪問などという無味乾燥な言葉ではなく、恵にとっては逢瀬だった。
「難しくて、よくわかりませんでした。もっとお勉強をして賢くなってから、必ず読みます」
「そうね。あなたには難解だったかしら」
昨日の激した様子は嘘みたいに、いつもの優しくて凛々しいお姉様だった。
「でもね」
ユリが声をひそめた。
「誰にも見つからないように隠しておいてね。もし密告されたりしたら、山崎さんと同じ、いいえ、もっとひどい目に遭わされるかもしれない」
そんな物騒な代物なら返してしまおう――とは、もちろん考えなかった。この冊子は、恵とユリを結ぶただひとつの、目に見える絆なのだから。
とはいえ。絶対に見つからない隠し場所なんてあるだろうか。あの女は、あたしの落ち度を見つけようと重箱の隅までつついている。お姉様みたいに、本棚の奥に隠すくらいで

は駄目だ。いっそのこと……
「紙に包んで鞄の底に隠して、絶対に見つからないようにします」
西欧ふうにプライバシーというものを重んじる白薔薇聖女学院では、持ち物検査なんかはしない。それに、もし万が一に見つけられても、なんとか穏便に済ませてくれるだろう。特高警察に通報して二人目の縄付を学校から出したりは絶対にしないはずだ。
「そうね。それがいちばん安全かもしれないわね」
ユリも手を打って、恵の案に賛同した。
「辛気臭いお話は、ここまでにしましょう」
ユリはあらためて教え子を抱き締めて、濃密な接吻を貪った。貪りながら、恵のセーラー服を脱がし、自分も薄物のカーデガンを脱ぐ。恵のブラウスを脱がしシュミーズをずらし、自分はブラウスと乳バンドをはずす。乳首と乳首をこすり合わせながら、恵のスカートを落とし、自分もスカートを脱ぎ――二人とも一糸まとわぬ姿になった。
「今日は、ゆっくり遊びましょうね」
ユリが小机の引き出しから白い紐の束を取り出した。それを二重にして腰に巻いて前で結ぶと、四本の紐が下に垂れる。そのうちの二本を、ユリは股間に通して後ろへ引き上げた。
「……？！」
恵は呆気に取られて、ユリのすることを眺めている。白い二本の紐が淫裂の中に埋没する。残りの二本は淫唇を挟む格好で鼠蹊部に沿って後ろへまわされた。
「これを着けてるとね……」

股間に通る紐をユリは自分で下に引っ張った。紐が淫裂から浮いて、十センチほども伸びる。ゴム紐だった。

パチン。

ユリが指をはなすと、ゴム紐は音を立てて淫裂に食い込んだ。

「くうう……痛い。でも、逝きそう」

呻いてから、妖しく微笑む。

「いつでも、好きなときに逝けちゃうのよ」

恵はただ目を丸くして、黒い淫叢に埋没した白い紐を見つめている。性の知識をまったく持たない恵には、これがとんでもなく淫卑な自虐遊戯だともわからない。

「あなたにも着けてあげるね」

腕を引かれて、恵はふらあっと立ち上がった。颯爽とした女先生であり、すさまじい快楽を教えてくれた歳上の女性に、わずかでも逆らうなんて思いもよらない。ユリお姉様と同じことをしてみたいという、積極的な意志さえはたらいていた。

ユリが後ろにまわって、恵の腰に二重のゴム紐を巻きつける。ズロースに通した一本のゴム紐でも、長さを間違えるときつく肌に食い込む。それが二本になってわざと引き絞られるのだから――腰を巻かれるというよりも縛られている感じだった。

ユリの指が淫裂を左右にくつろげて、その中芯に二本のゴム紐を食い込ませる。

「あ……くううう」

指で弄られるのとは、まったくちがう鋭い感触。はっきりと痛みがあった。それでいて、腰の奥から熱い快感が滲み出てきた。左右から淫唇を圧迫されると、痛みよりもくすぐっ

たさを感じる。
「ふうん。恵のほうが、見栄えがするわね」
ユリのゴム紐は縦の部分が淫叢に隠れているが、ごく淡い恵では、くっきりと白い筋が見えている。ゴム紐の張り加減にもよるのだろうが、未性熟な淫裂の上半分くらいは、紐が露出している。
「ふふ……いくわよ」
ユリがゴム紐を引っ張る。自分のときの半分くらいしか伸ばしていないのだが、それは恵からはわからない。
バチッ！
股間で爆弾が破裂したような衝撃だった。
「きゃああっ……！」
恵は両手で股間をかばって、その場にうずくまった。
「痛いけれど、じんわりと気持ち良くなってこない？」
言われてみると――そんな気がしないでもなかった。鋭い痛みが爆発した部分が、じんじん疼いている。その疼きの奥に、快感なのだろうか。足が痺れているときみたいな、もどかしいような感覚がひそんでいた。
「……」
こくんと、恵はうなずいていた。見下ろすユリの唇の端がかすかに吊り上がったのは、もちろん見ていなかった。

つぎの月曜から、恵の日課にわずかな変化が生じた。登校時刻が三十分早まったのだ。家でゴム紐の褌（ふんどし）を締めて、雲を踏みながら登校して、やはり早めに出勤しているユリに検分してもらってから、褌をほどく。もちろん、そのたびに接吻とか愛撫の御褒美をもらえるのだから、恵に否やはない。

「なぜ、あたしにこんなことをさせるんですか？」

それでも尋ねてみずにはいられなかった。

「あら、厭なの？」

「そうじゃないです。でも……」

「ふふ。わたしって、恵が思っているよりもずっと、変態なのよ。可愛い子に羞ずかしいことをさせるのが大好きなの」

最初の頃と違って、ユリは自分の性的な偏向を隠そうとしなくなっている。それに引きずられるように、恵も思春期にありがちな同性への傾倒を越えて、ユリのときとして嗜虐的でさえある趣向に馴らされていった。

たとえば、ユリの手でゴム紐をほどいてもらう前には、ハンケチを口に頬張る。パチンと弾かれても悲鳴を漏らさないためだった。最初のような手加減はされず、ゴム紐が切れる寸前まで引き伸ばされるのだから、痛みは激烈だった。そのかわり、疼きの中からたちのぼってくる痺れるような快感も強い。一時限目の受業は上の空になってしまう。

ユリに悪戯されるのは下半身だけではなかった。自分の掌ですっぽりと乳房を包んでしまえる恵は、まだ乳バンドをしていなかったのだが、ユリに強いられて（半ばは悦びながら）変態的なそれを身に着けるようになっていた。乳房の上下にゴム紐を巻いて、その間

に輪ゴムを張り、そこに乳首を嵌め込む。輪ゴムは、乳房が変形して服の上からわかるほどきつくはしない。それでも、常に乳首が刺激されて妖しい気分になってしまう。体練のある月曜と金曜は赦してもらえるが、火水木と土曜日は、登校から下校のあいだ、ずっと身に着けていなければならない。

そして、これはユリの気が向いたときだけだが。週に一度くらいはゴム紐褌をはずした後で、淫蕾に輪ゴムを巻かれるときもあった。こうなると、授業どころではない。級友に話しかけられても、トンチンカンな受け答えをしてしまう。

こんな悪戯がずっと露見せずに済むはずもないのだが、家長の承諾があれば婚姻が認められる年齢に達したばかりの少女には、そんな世間知も備わっていない。歳上の女性に導かれるままに、禁断の快感に身をゆだねるばかりなのだった。

二・逮捕

・校門前の摘発

「今日は半ドンだから、ずっとそのままでいなさい」

そう命じられただけでなく、ゴム紐の下着があるのだからこっちはいらないでしょうと、ズロースを取り上げられた。淫裂に食い込むゴム紐の褌と、乳首を刺激する輪ゴムの乳バンド。そんな羞ずかしい（目くるめく）下着で、恵は授業を受けねばならなかった。

放課後はお姉様の下宿先での逢引。それをできるだけ考えないように努めなければならなかった。すでに股間は、梅雨時の校庭に負けないくらいに濡れている。水色のスカートに大きな染みを作ってしまいかねない。思い余って、最初の休み時間に便所に籠って、シュミーズの裾をたくし上げて股の下で結んだ。淫裂を結び目に押し付けていれば、布地が淫蜜を吸ってくれる。もっとも、結び目に刺激されていっそう淫蜜を滴らせてしまったのだけど。

午前の終わりを告げる鐘が鳴り終えて。駆け出したいのをこらえて、恵は傘をさして校門を出た。雨に濡れたらセーラー服が透けて、羞ずかしい線が見えてしまう。

ユリを待っている車の場所へ向かって歩き始めた、その鼻先に二つの人影が立ちはだか

った。一人は制服姿の巡査、もう一人は雨合羽を着て鳥打帽をかぶっている。恵の背後からも別の私服刑事が現われた。
目の前に金文字を配した黒革の手帳が突きつけられた。
「瀬田恵だな。発禁本を所持していると通報があった。所持品を調べる」
ふうっと目の前が暗くなった。ズロースひとつの半裸で縄打たれてしょっ引かれた山崎先輩の姿が、薄暗闇の中に浮かび上がった。気絶せずに踏みとどまったのは、セーラー服の下に破廉恥な、下着ともいえないゴム紐を着けているという、その思いだった。絶対に見られるわけにはいかない。でも、あの本が見つかったら……紙で包んで底板の下に隠してあるから、気づかれないで済むかもしれない。
すでに、何十人もの生徒が十メートルほども距離を開けて遠巻きにしていた。校舎から駆け出てくる教師の姿もチラッと見えた。
私服刑事のひとりが恵の鞄を取り上げて、逆さにして振るった。こうなったら、糊で貼り付けでもしていないかぎり、隠しようもない。
バサバサッと、教科書やノートが路上に散乱し、最後に紙に包まれた小さな四角形がストンと落ちた。
「ふん……」
私服刑事が紙包みを取り上げ、中身を確かめると――ほおおと、驚きの声をあげた。
「猥褻本か、せいぜい主義者の宣伝誌かと思っていたが――まさかに『共産主義宣言』とはねえ。無事に娑婆へ戻れるとは思うなよ」
恵の動きを見張っていた年輩の私服刑事が、目の前まで駆けつけたものの手をこまねい

て傍観しているしかない校長を振り返って、大仰にうなずいた。
「制服での捕縛は困るのでしたな」
返事を待たずに恵のセーラー服に両手を掛けて、一気に引き裂いた。
「いやあああああああっ……！」
恵は傘を放り出してその場にしゃがみ込もうとしたが、若い私服刑事に羽交い絞めにされた。ハンチクな男女同権論者とまぎれもない主義者とでは、扱いが違う。争って下着まで千切れた態を装わなくとも――
ピイイイイッ。
シュミーズが真っ二つに引き裂かれて。そこで、刑事の手が止まった。
「な、なんだ？　これは……」
「……」
恵は固く目を瞑って、それ以外に為す術を知らなかった。悲鳴をあげるのも羞ずかしい。身をもがくのも羞ずかしい。この瞬間に心臓麻痺でも起こすか、いっそ雷にでも打たれて死んでしまいたい。
「ひぐっ……」
乳首を摘ままれて、恵の喉がしゃっくりのような音を立てた。
「輪ゴムか。乳首を挟み込んで、これは何の真似だ？」
「あいつ。なんだって、こんな余計な……」
「泊ッ……」
年配の刑事が鋭く制して、首を小さく横に振った。若輩のほうは、亀のように首をすく

める。
「こやつ、オルグと出来ておるのではないか。亭主の好きな……乳飾りというやつか」
「いや、この娘は未通女(おぼこ)……い面して、とんだ阿婆擦れですね」
なんだか途中から言いつくろったような物言いだった。
「あまり手間を掛けても野次馬が増えるだけだ。とっとと縄を掛けちまえ」
「はいッ」
職務熱心だけでは説明のつかない、弾んだ声。若い刑事は恵を突き飛ばして、うずくまりかけたところを引き起こして早縄を掛けた。手首をねじ上げて、縄尻を首に巻いてから二の腕を縛る――山崎華江と同じ縛り方だった。正面からは、首を巻く縄しか見えない。それだけに、乳房の上下を巻く白いゴム紐と乳首を挟む茶色の輪ゴムとが、ひときわ目につく。
若い刑事が縛り終えた恵の腋に手入れて無理強いに立ち上がらせ、年配の刑事が恵のスカートに手をかけた。
「それだけは赦してください」
恵は必死に訴えたつもりだったが、その声はほとんどつぶやきだった。
「山崎華江はズロースひとつにしてやったが、おまえのような阿婆擦れにはそれでも過分だぜ……と、なにいい？」
スカートを引きずり下ろしてみれば、シュミーズが股の下で結ばれている。
「とことん変態じみた格好……げえっ、これは！」
「うあああああ……」

恵の膝が折れて、羽交い絞めにされているので半分宙に浮いた形になった。
「これは……さしずめ、紐の褌か」
「こいつ、濡らしてますよ。とんだ淫乱変態だ」
若いほうが、ズロースの結び目を指で摘まんで、呆れた声をあげた。ぴぴっと手を振ってから指を擦り合わせ、それでも淫汁が残ったのか、恵のささやかな乳房を鷲掴みにして汚れを拭き取った。
若い巡査の手で、恵は壊れた人形のように吊るされている。頭をがっくり垂れて、真っ赤な顔から大粒の涙を地面に滴らせていた。
年配の刑事が恵に腰縄を打ってから、若い刑事に手を放させる。地面に崩れ落ちようとする恵を腰縄で吊り上げて。
「とんだ余興で時間を食った。さっさと帰庁するぞ――歩け」
パシンと平手で尻を叩いた。
それでも、恵は歩かない。いや、自分の足で立とうともしない。
「しょうがないな」
年配の刑事が腰縄を緩めると、恵はその場にしゃがみ込んだ。
「泊、そっちの足を持て」
「は、はい？」
「俺は、こっちを持つ」
恵の足を左右から引っ張って開脚させた。
「このまま署まで引きずって行ってやる」

「ひいいっ……」
あわてて恵が身体を起こした。地面を引きずられて身体が泥だらけになろうと傷だらけになろうと、どうでもいいことだ。けれど、大股開きを衆目に曝すなんて、恥の上塗りだ。
「歩きます……」
立ち上がろうとしたが、腕を縛られているので平衡を失って、転んでしまった。
「遠慮するな」
身をよじって足首に伸びる手から逃れ、よろめきながら立ち上がった。
パシンとまた尻を叩かれて、ふらふらと足を踏み出した。腰縄を前へ引かれて、つんのめりながら左右の足を交互に大きく踏み出す。
腰を隠してほしいと訴えることさえ、恵は忘れていた。
恵はしゃくり上げながら、警察署まで歩かされた。途中で何十人何百人もの人に全裸よりも羞ずかしくて浅ましい姿を見られたのだろうが、なにも覚えていなかった。勢いを強めた雨に全身を打たれても、冷たさを感じるどころではなかった。それどころか、恵の裸身は羞恥に赤く染まって、かすかに湯気が立っていたのだった。
警察署で縄をほどかれて、残っていた靴と靴下も脱がされてから、ようやく羞ずかしい下着を剥ぎ取ってもらえた。全裸のままで写真を撮られ、十本の指全部の指紋を採られた。
「これから、おまえは番号で呼ばれる。お前の番号は二千六番だ。番号を呼ばれたら、ちゃんと返事をするんだぞ。返事が無ければ――いろいろと後悔することになるぞ」
学校でも出席番号で管理されているから、そんなに抵抗は感じなかったのだが。
「わかったな、二千六番」

名前を抜きで呼ばれると、物扱いされているようで、ごく小さな反発を感じてしまう。
「はい……わかりました」
「声が小さい。わかったな、二千六番」
「はい、わかりました！」
羞恥心に打ちのめされていて、ほかのことは考えられない。
「まあ、いいだろう。それから、今ひとつ言い渡しておくことがある。裁判で有罪が確定するまで、おまえは囚人ではない。最低限の食事は支給するが、他はすべてが自弁だ。衣服もだぞ。意味がわかるか？」
最後の言葉に厭な予感を覚えつつ、恵は横に首を振った。
「つまりだな。誰かが差し入れてくれるまで、おまえは素っ裸でいなければならん。さっきのゴム紐は返してやってもいいがな」
やはり――厭な予感は当たっていた。けれど。往来を素裸よりも羞ずかしい姿で引き回されて、今さら服を着ることに意味があるとも思えなかった。
「ふん。ずいぶん平然としておるな。前の二千五番、山崎華江だったか。あいつは物凄い権幕で食って掛かりおったぞ」
年配の刑事は、彼女がそれからどうなったかまでは言わなかった。あらためて捕縄を手に取って、それを二重に折った。
「被疑者を移動させるときは、それが署内であっても拘束するのが規則だからな」
恵の手がふたたび背中にねじ上げられて、手首を縛された。校門の前で縛られたときと違って、胸の上下にも縄が巻かれ、首を巻いた縄が左右の乳房を割るように胸縄を絞り上

げた。
その一切が、恵にとってはおぼろな悪夢だったのだが。
「あんな紐褌よりは、こっちのほうが、おまえも嬉しいだろう」
捕縄よりもずっと太い荒縄を腰に巻かれて――股間に鋭い痛みを感じて、ようやく恵は正気を幾分かでも取り戻した。
「痛い……ぐううう」
股間に視線を落とすと――二本の荒縄が淫裂を割って食い込み、爪先立ちになるまで恵を吊り上げていた。その縄が前で腰縄に結びつけられて折り返し、鼠蹊部に沿って後ろへ引き上げられた。ゴム紐の褌と同じ形だった。ゴム紐の十倍以上も太く、ゴム紐と違って縄はささくれている。それを身体が浮くほどの力で引っ張られるのだから、無数の針を突き刺されるほどにも痛い。
「これからは、これがおまえの着衣ということになるな」
年配の刑事が、頬を歪めて――嗤ったのだろうか。恵は、刑事の目つきがいやに粘っこいのを肌寒く感じていた。男の淫欲に身を曝したことなどない少女にも、この目つきがそれなのだと本能的に察せられた。
特高警察にしょっ引かれた娘は、お嫁に行けない身体にされてしまうという噂を思い出して、恵は恐怖に駆られたが――校門の前で羞ずかしい姿を曝した時点で、自分はその資格を失っているのだとあらためて気づいて、さらに打ちのめされてしまった。
恵は、まだ自分が恥辱と拷虐の門口(とぐち)にも立っていないのだとは、知る由もなかった。
「まずは、お仲間に引き合わせてやろう」

廊下に引き出され、恵はその門口に向かってふらふらと歩まされるのだった。

・四人の贄少女

渡り廊下の向こう側にある別棟が、留置場と取調室になっている。廊下の左右に並ぶ鉄格子は、雑居房や独房。留置されているのは、手前の向かい合った二つの房に男が二十人ほど、そのつぎが右側に女が五、六人。背広を着た男もいれば、浮浪者めいた襤褸をまとった女もいる。裸形の者はいなかった。左側は空いている。

男たちは、あまり驚いた様子もなく恵の裸姿を眺めている。

「刑事さん。今度の子には、やけに気合を入れてますねえ」

看守を務めている巡査が牢の前に立って、声をかけた男の肩を六尺棒で強く突いた。

「いてて――悪うございましたね」

男はたいして痛そうなそぶりも見せず、牢の奥へ引っ込んだ。

いちばん奥の房の一方には、着衣がズタズタに裂けて身体のあちこちに傷を負っている男が三人。反対側の房は空いていた。

その場のなにもかもが、恵の頭を素通りする。一歩ごとに股間に食い込んでくる荒縄の毛羽。その刺激に耐えるだけで精いっぱいだった。

取調室は廊下の左右に二つずつと、突き当りにひとつ。その突き当りのドアが開けられて。

「んぐ……！？」
眼前の異様な光景に立ち竦む恵。どんっと背中を突き飛ばされて、たたらを踏んだ。
正面の奥で、外人の娘が細い鉄棒を跨いでいた。恵と同様に素裸で、恵よりもさらに厳しく後ろ手に縛り上げられていた。乳房と尻がどす黒く腫れて、全身に赤や紫の線条が刻まれている。
「……？」
垂れかかる栗色の髪に隠されてはっきりとはしないが、恵はこの娘を見知っているような気がしていた。
「わかったようだな。二月に女学院を追い出された稲枝紗良（いなえさら）だ」
やはりという思いと、まさかという思いとが交錯した。恵の一学年上の稲枝紗良。彼女の父親は伊太利人の神父だった。教会での説教で反戦を説いた容疑で逮捕されて、本国へ強制送還された。紗良は、進級を目前に放校処分となっていた。その後の消息は聞かなかったが、まさか特高警察に逮捕されていたとは。父親の罪と関係しているのだろうか。
それにしても。ずいぶんとやつれている。恵の知っている紗良は、ふくよかと豊満を掛け合わせたみたいな体型だったのに、目の前の彼女は――体の線は細くなったのに乳房と尻は以前の面影を強く残して、性に無知な恵の目にさえ妖艶に映った。
「もっと近寄って、よく見ておけ」
肌が触れ合うほど近くまで押しやられて、恵は思わず顔をそむけた。
「よく見ろと言っておるのだ。事と次第によっては、おまえもここに座らせてやるのだからな」

ひぐっと、恵は息をのんだ。
鉄棒に跨っているように見えたのは、細い鋼線を編んだワイヤーだった。その直径は一センチちょっと。細い鋼線が切れたりほつれたりしてささくれている。こんな物を股間に食い込まされたら、荒縄の毛羽とは比較にならない激痛だろう。しかも、膝を折り曲げて縛られ、そこからコンクリートブロックを吊るされていた。ワイヤーが食い込む淫裂は無毛だった。しかし、白い肌ではない。淫裂は赤く染まり、下腹部には細い筋が斜めに何本も交差していた。刃物で切られたにしては、カギ裂きのような傷だった。
紗良は恵が近づいても、まったく関心を示さなかった。おのれを苛むワイヤーに虚ろな視線を落として、ぴくりとも動かない。身じろぎひとつしても、ワイヤーはいっそう紗良を傷つけるだろう。
「ひととおり、お仲間に挨拶しておけ」
言われて、ようやく。ほかにも二人の娘が、同じように素裸で、しかし別々の格好で拘束されているのに気づいた。そして、恵を連行した二人だけでなくさらに四人の男たちがいた。
娘のうちの一人は、二週間前に逮捕された山崎華江。後ろ手に縛られ胡坐を組まされて、顎が踝（くるぶし）に接するまで裸身を二つ折りにされていた。背中にはコンクリートブロックが四つも縛りつけられている。紗良ほどではないが、尻が赤く腫れている。
そして、もう一人は椅子に、背もたれを後ろ手に抱く形で縛りつけられて、引き出しが無く天板だけの大きな机を挟んで二人の男と向かい合っている。ひとりは五十絡みの私服で、もうひとりも私服だがせいぜい三十半ばといったところ。すこしはなれた壁際の小机

に座っている若い紺サージの制服は、記録係だろうか。
「こいつも知っているはずだぞ」
恵には見覚えがなかった。学年が違えば、名前を知らないどころか顔を見たこともない生徒も少なくない。
「山崎華江と同学年ということは、お前の二つ上だな。河瀬弓子（かわせゆみこ）だ」
名前だけは知っていた。卒業と同時に結婚する者も毎年何人かはいる。誰某が婚約したという噂は、すぐ学校中に知れ渡る。そういえば――新学期が始まって間もない頃、彼女の婚約者に赤紙が来たのだけれど。人が人を殺すなんて悲しいことだと級友に嘆いて、教頭先生に注意されたという話も聞いていた。誰かが特高に密告したのだろう。
「反戦論者に男女同権に、あげくは主義者か。おまえの学校はアカの巣窟だな」
恵は取調官の斜め後ろに立たされた。
「おまえの尋問は明日からだ。今日のところは、強情を張るとどうなるか、よく見ておけ」
恵の左足首に、滑車を介して天井から垂れている綱の一端が縛りつけられた。反対の端を、泊という若い私服刑事が引っ張ると――左足が吊り上げられて、恵の身体が右に傾いていく。
「あ……」
恵は爪先立ちになって、身体が倒れないように踵の位置をずらした。それを何度か繰り返すうちに左足は頭よりも高く引き上げられて、意識して上体を左へ起こしていないとひっくり返りそうになる。
「最初だから、すこし甘やかしてやろうか」

恵を縛った男がお下げを引っ張って、左の腿に巻き付けた。おかげで、腰を突っ張っていなくても立っていられるようになったのだが。
「なんじゃ。人が親切にしてやっとるのに、礼も言わんのか」
縄で縊り出された乳房を爪が食い込むほどに握りつぶされ、ぎりぎりとひねられた。
「い、痛い……ありがとうございます」
「乳を虐めて礼を言われたのは初めてだな。そうか、こうされるのが好きか」
恵の言葉をわざと取り違えて、男はいっそう乳房をひねる。
「違います……転ばないようにしてくださったことに、お礼を言ったのです」
「そうだろうな。虐められて悦ぶなど、あの女くらい……」
「浜村ッ」
弓子に向かい合っていた男が、鋭く叱った。
「余計なことを言うな。それから、浅利クン。キミは下がってよろしい」
浅利と呼ばれたこれも中年の男が、軽く頭を下げて部屋から出て行った。
部屋に残った男たちも、それぞれに場所を変える。恵を逮捕した中年と若手のコンビは紗良の横に折りたたみ椅子を据えて陣取り、海老責めに掛けられている華江には別の若い男がついた。そして恵の前には、それまで部屋の隅で壁にもたれていた、これも若い男。
「そうだ。事の流れで後先になって、すまんな。おい、瀬田恵。そこにいる警部が、おまえを担当する青谷クンだ」
青谷が、恵に向かって軽くうなずいた。
「最年少と聞いていたが、まずまずの身体つきだな」

紗良先輩のように容赦なく拷問できるという意味なのだろうかと――恵は怯える。
「課長殿。この者の尋問は明日からですね。僕はこれで失礼してよろしいでしょうか」
弓子と向かい合って座っている男が、ふっと小さく息を吐いた。
「まったく、キミは淡泊だな。よろしい。他の仕事を片付けておきたまえ」
「では、失礼します」
青谷も退出して。部屋に残っている男は、私服刑事が五人と制服の巡査が一人。弓子たち被疑者を数えると十人にもなるのだが、狭苦しい感じはない。この部屋は教室ほどの広さがあるのだと、恵は気づいた。様々な拷問を同時に行なうための広さだとまでは、知る由もなかったが。
実際、今現在でも――紗良への性器拷問、華江への海老責め、恵への吊り責めが、弓子への尋問と並行して進められているのだ。その、弓子への尋問も（全裸で椅子に縛りつけられているというだけでも）拷問であることに変わりはない。
「さて……どこまでだったかな。慰問の手紙は書いたが、反戦的な文言は一切含んでいない。そう言ったのだな？」
「もう何度も言いました。変なことを書いて、それが上官の目に触れでもしたら、島本が目をつけられて……非道い目に遭います」
「しかし、昨日は『何があっても、必ず生きて帰ってください』と書いたと供述しておるな。自決することなく俘虜の辱めを受けてもかまわんというのは、反戦ではないか」
「そういう意味で書いたのではありません」
「では、どういう意味だッ！」

「……」
課長が椅子から立ち上がった。机の端に置いてあった細い竹を手にして、弓子の横にまわる。竹の先でチョンチョンと乳首をつついてから、大きく振りかぶる。
ビシイッ！
肉を打つくぐもった音が響いた。
「くうう……」
竹の笞は、膝を椅子の脚に縛りつけられて無防備になっている内腿に敲きつけられていた。
「どういう意味なのだ？」
ビシイッ！
二発目は反対側の内腿を襲った。
（あんなにひどく敲かれて、叫びも泣きもしないなんて……）
恵を吊るした男の言っていた『強情』という言葉を、恵は思い出していた。竹笞など小手調べですらないとは、思い至るはずもない。
「しぶとい娘だな。いいだろう。他のことを尋ねてやる」
課長は竹笞を机に戻して弓子に正対すると、身を乗り出して両手で双つの乳房を鷲掴みにした。
「学校で反戦的な言辞を弄したとき、それに賛同した生徒はいなかったと言うが、ほんとうか？」
第一関節がめり込むまで指を食い込ませて、ぎりぎりと内側へねじっていく。

「ぐうう……弓子は、ほんとうのことしか言っていません」
同じようなことをされたばかりの恵は、弓子が耐えているのを見ても今度は不思議に思わなかったのだが。
課長は手首が返るまで乳房をねじっていった。ほとんど百八十度。見る見るうちに、乳房が赤黒く変色していく。
「つまり、おまえの言葉をたしなめることなく聞いていたわけだ。そいつらも同罪だな」
いったん手を放して掴みなおすと、今度は外側へねじっていった。
「い、痛い……アキ……」
そこまで訴えて、ハッと息をのんで言葉を繕った。
「……呆れていただけです」
課長は右手で竹笞を握り、左手につかんだ乳房をピタピタと叩く。
「うん？　アキと言ったな。同級生の岸辺章子のことか？　それとも……淀江クン、名簿を持ってこい」
制服姿の巡査が、小机の上に積んである書類から薄っぺらい冊子を抜き出して、課長の前に広げた。
「アキ、アキ、アキ……守山秋江。こいつか？」
「違います。二人とも、その場にいませんでした」
課長が竹笞を振りかざして、掌の上の乳房に敲きつけた。
ビッシイン！
「きひいっ……！　弓子は『呆れた』といっただけです。秋江さんも章子さんも無関係で

す」
「強情だな」
課長は乳房から手を放して、一歩下がった。そして。
ビシッ！
ビシッ！
ビシッ！
立て続けに乳房を打った。
「しかたがない。この二人を呼んで、当人から話を聞くか」
「やめてください！　ほんとうに、二人とも無関係なんです」
「では、だれがお前の話を聞いていたんだ？」
「……」
不意に弓子の目に涙が湧いた。まぶたにあふれて、開脚させられた股間に滴る。
痛くて泣いているのではないと、恵にもわかる。黙ってきいていただけで同罪だと、課長さんは決めつけた。話を聞いていたクラスメイトの名を明かせば、その人たちも同じように逮捕されて、こんな辱めを受けることになるのだろう。けれど黙っていたら――二人のアキさんが濡れ衣を着せられる。弓子先輩の涙は悔し涙なのだ。
「言え。さっさと白状しろ」
課長は十文字に竹笞をふるって、乳房も内腿も立て続けに打ち据え始めた。
「きひいいっ……やめて……悪いのは弓子なんです。友達は誰も悪くないんです」
一度でも涙をこぼしたら、悲鳴をあげたら、それで気持ちの張りが失われて、それまで

は耐えていた痛みにも耐えられなくなる。そのことを、恵はまざまざと見せつけられた。
（明日は、あたしも同じ目に遭わされる……同じ目？）
弓子先輩と同じように敲かれるのだろうか。それとも、紗良先輩みたいな残虐なことまでされるのだろうか。眺めているだけで、想いは千々に乱れる。
「課長殿……」
最初の位置から動かずに、机を挟んで弓子の前に座り続けていた男が、遠慮がちに声をかけた。
「そんなに畳みかけても、答えようがないのではありませんか。しばらく考えさせてやってはいかがかと思料いたします」
課長が手を止めた。
「大岩クン。キミは甘いね。しかし、担当官の意見は尊重すべきか。いいだろう。椅子から解放してやりたまえ」
「ありがとうございます」
なぜ、大岩という男が礼を言うのか恵にはわからなかったが。とにかく、弓子先輩への拷問は終わったのだと、恵は安堵の息を吐いた。
大岩は弓子の拘束をほどくと、腰を抱きかかえて椅子から立ち上がらせた。
「えええっ……？！」
恵は叫んでいた。自分が裸に剥かれたときよりも、よっぽど大きな悲鳴だった。
恵は、生まれて初めて目にする異様な物体と、弓子の股間とを交互に見比べていた。
弓子が座らされていた木の椅子は、座面から禍々しい二本の物体が屹立していた。座面

の手前側には、直径が六センチはあろうかという擂粉木。しかも、擂粉木の表面には不規則な凸凹が刻まれている。擂粉木から数センチ奥には金属の棒。表面が鮫肌のようにざらついている。木工用のヤスリかもしれない。

そんな椅子に座らされたらどうなるか、どことどこを貫かれるかは、処女の恵でも容易に理解できた。椅子に座らされること自体が、乳房を握りつぶされるよりも竹笞で打ち据えられるよりも、はるかに残虐な拷問だったのだ。

恵の驚愕は、その拷問道具だけではなかった。弓子の内腿に血が伝っているのは、肛門をヤスリで抉られたせいだろう。でも、ぬらぬらと絖っているのは……ユリの愛撫に馴らされた恵には見紛いようもなかった。

「なんだ。物欲しそうに涎を垂らしおって。特製の擂粉木でも食い足りんのか」

弓子の異変に気づいたのは恵だけではなかった。課長が、それまでの強面(こわもて)顔を崩して下卑た嗤いを浮かべた。

「大岩クン。遠慮はいらん。キミの抜き身で満足させてやれ」

「はいッ、本官の抜き身で容疑者を満足させてやります」

恵には意味不明な復唱をすると、大岩は弓子を床に横たえた。そして、ベルトを緩めてズボンをずり下げる。

（……！）

課長と大岩の言葉の意味を理解して、恵は三度(みたび)驚愕した。いや、四度になるだろうか。弓子は大岩の仕種を見上げて――諦めたように目を閉じたのだった。紗良とは違って、まだじゅうぶんに抗うこともできそうなのにもかかわらず。それとも、連日の拷問で気力を

奪い尽くされているのだろうか。それにしては、最後まで尋問の言葉を否定していた。
越中褌までかなぐり捨てた大岩の股間には、椅子に突っ立っている擂粉木に似た肉の棒が聳え立っていた。男女の営みとは具体的にどういうことをするのか、恵はたった今まで知らなかった。けれど、擂粉木がどんなふうに弓子を貫いていたかを目の当たりにして、それとそっくりな物が男の股間に生えていれば、おのずと理解してしまう。生まれて初めて見る、男の禍々しい怒張に恵は恐怖さえ感じて――それでいて目をそらせなかった。
「どうした、瀬田恵。さんざっぱら男を咥え込んでおいて、なにを驚いた顔をしている」
恵を縛った刑事が、揶揄(からか)いの言葉を浴びせた。彼は、紗良に跨がらせたワイヤーの端に手拭いを巻いて、そこに肘を突いていた。
課長が訝しそうに彼を見た。
「浜村クン、それはどういう意味だね？」
「ああ、そうそう。逮捕したときの様子を、まだ御報告しておりませんでした」
よいしょっと、ワイヤーをつかんで浜村が立ち上がった。手を放すと、浜村の体重で余計にたわんでいたワイヤーがピンと張って、紗良をかすかに呻かせた。
「実はですね……」
浜村が課長に長々と耳打ちを始める。
その間にも、大岩が弓子の脚を広げさせてその間に腰を落とし――左肘で体重を支えておおいかぶさりながら、右手は怒張を握って弓子の濡れそぼった淫裂に導く。
「うんっ……」
グイッと、大岩が腰を進めた。

「あああっ……浩二さん、ごめんなさいいい」
弓子が小さく叫ぶ。
「なにが、ごめんなさいだ。いとも簡単に咥え込みやがってからに」
ずんっ、ずんっと、大岩が腰を突き出しては引き戻す。
「ひっ、ひっ……」
そのたびに弓子が小さく喘ぐ。痛みを訴える声――と、恵には聞こえた。大岩の肉棒は、擂粉木よりも細く見える。けれど、傷ついた部分を掻き回されたら痛いに決まっている。
「なるほど……面白いな。しかし、なんだって、そんなことを？」
「小生にも見当がつきかねております。本人に問い質したほうがよろしいかと」
「うむ……ところで、乃木クン」
課長が思い出したように、華江の横に立っている若い男に声をかけた。
「山崎華江も、そろそろ限界じゃろう。唇が紫色に変じておる。いい加減に赦してやれ」
「そのお言葉を待っておりました」
乃木と呼ばれた男が、華江の背中からコンクリートブロックを降ろした。華江の尻の後ろに靴をあてがい、両肩をつかんでゆっくりと引き起こした。そのまま、壁にもたせ掛ける。
「ほどいてやるが、その前にひと働きしてくれよ」
大岩より年下の、まだ青年の面影を引きずっているこの男も、中年男の厚かましさを見倣うのか平然とズボンをずり下げた。越中褌の中から現われたそれは、大岩よりも細いが天を衝く角度では勝っている――というところまでは、恵には見えない。それでも、腿に

縛りつけられたお下げを引っ張りながら振り返る視界の端で、乃木が怒張を華江の口に（！）押し当てているのは見えた。
華江は固く唇を引き結んで、しかし顔をそむけようとはせず、上目遣いに乃木を睨みつけている
「やれやれ、相変わらず情の強（こわ）いお嬢さんだ。男に負けまいと突っ張ったところで、力でねじ伏せられるのはわかっているだろうに」
乃木はわざとらしく嘆息してから、華江をまたうつ伏せに戻した。首と足とをつないでいる縄を、上体が半分ほど起こせるまで緩めた。そうしておいて、今度は膝がしらに靴をあてがって前へ倒す。華江は左右の膝と頭の三点で身体を支えて、尻をうんと突き上げた形にされた。
乃木が華江の後ろへ回り込んで、膝を突いた。
（まっ……！？）
いったい何度驚いたか、もう恵にはわからなくなっていた。ただ――二人の形を見た瞬間、二匹の犬がそんなふうにつながっていて、オトナに水を掛けられていた遠い記憶が甦った。つまり、あれもこういうことだったのだ、と。
乃木が腰を華江の尻に打ち当てると、びくんと華江が前につんのめった。
「くそう……負けるものか」
食い縛った歯の間から、そんな言葉が漏れたのを恵はたしかに聞いた。
――大岩と乃木は、それぞれに米搗きバッタさながらに腰を激しく衝き動かしていたが。まず大岩が、憑き物が落ちたようなさっぱりした顔で立ち上がった。壁の棚から落とし紙

を取って自分の肉棒を拭い、それから弓子にも落とし紙を放ってやった。弓子はのろのろと身を起こして落とし紙を拾い、それで股間を丹念に拭った。小水の後よりも、ずっと入念な拭い方だった。

大岩が後ろに立つと、言われるより先に立ち上がって、自分から手を後ろにまわす。肌にうっすらと赤みが差して頬も上気しているが、目だけは悲しそうに伏せられていた。８の字を縦二つに割ったような金具が、弓子の手首に嵌められた。蝶番で留められている金具を閉じて、そこに小さな南京錠が掛けられた。鉄の手枷――縄で縛られるよりは楽そうに見えた。

それは現代の感覚からすれば手錠と呼んでも差し支えのない拘束具だったが、近世になって西洋から導入された物ではなく、江戸時代には手鎖の名で知られていた。建前はともかく、実際には南京錠でなく紙縒りで封じられることが多かった。『手鎖の刑』に処せられた者は家の中では手鎖を外して何不自由なく生活し、奉行所に出頭するときだけは神妙に装着する。つまりは形式に流れた拘束具だったが――特高警察の手にかかれば、簡便にして厳重な拘束具になる。縄で縛られることには慣れている（？）日本人には、心理的な効果も大きい。

腰縄を打たれて、弓子は大岩の手で取調室から連れ出された。

やがて乃木も華江から離れた。自分の跡始末はしたが、華江の股間は汚れたままに放置して、弓子と同じ８の字形の二つ割手枷を嵌めてから縄をほどいてやった。華江も、乃木に腰縄を引かれて取調室から姿を消した。

二人への扱いの差が、つまり従順と不服従の応報なのだろう。

あたしは華江さんよりも無下に扱われるだろうと、恵は覚悟せざるを得ない。まだ未通女なのだ。犯されそうになったら、死に物狂いで抵抗しなければならない。いよいよとなったとき、舌を噛み切って自害まではできないだろうけど――と、そこまで考えて虚しくなった。純潔を守るのは、将来の夫の為だ。でも、変態じみたゴム紐褌を他人の目に曝して、あげくに縄付で街中を引き回された。とっくに、お嫁に行けなくなっている。純潔を守って、それでどうなるというのだろう。

「ずいぶんと休ませてやったな。取り調べを再開するか」

課長の言葉で、恵は絶望の深みから現実という悪夢に引き戻された。

紗良が頭を垂れたまま課長に顔を向けていた。そこには、人形ほどにも表情が浮かんでいなかった。

「こいつも、最近はふてぶてしくなりおってな。どうだね、浜村クン。新入りのお嬢さんに覚悟を決めさせるためにも、ちと張り切ってみるか？」

紗良の顔に怯えの色が奔ったのに、恵が気づいた。この浜村という人は、課長さんよりもずっと残酷な拷問をするのだろう。

「針を使いますよ。かまいませんか？」

「もちろん、もちろん。なんだったら、焼き鏝でもかまわんぞ」

「いやあ、あれは準備が大変ですし」

浜村が、ちろっと恵に目を向けた。

「そっちは、案外とあっさり落ちるかもしれませんしね。病院送りにするのは、もっと先でもよいでしょう」

「それもそうだな」
何事か恐ろしい相談がされたらしいとはわかるが、それが何なのかは、そのときの恵にはわからなかった。

・残虐非道の責

弓子と華江がそれぞれ私服刑事に連れ出されて、部屋に残っているのは恵と紗良。そして、課長と呼ばれている五十絡みの男と、すこし若い浜村。制服の巡査は、ずっと小机に向かい合って、真っ白い調書と睨めっこをしている。
浜村は、紗良ではなく恵の横に立った。
「そっち向きでは、よく見えんだろう」
乳房をつかんで身体を回し、恵を紗良に正対させた。
「おまえも強情を張れば、同じように扱ってやる。それを胆に銘じておけよ」
胆がそこにあるとでもいうのか。淫裂を割って食い込む縄を握り、ぐいと手首をひねった。縄が淫裂をひしゃげさせるほどに食い込む。
「い、痛い……やめてください」
鋭い痛みが甦って訴えた――いや、哀願したのだが。
「これしきは痛いうちにはいらん。痛いとはどういうものか、こっちの娘に聞いてみろ」
それでも、浜村はすぐに手を放した。そして、いよいよ本ボシにとりかかった。

「顔を上げろ」
浜村が紗良の前髪をつかんで強引に顔を引き起こす。が、手を放すと紗良はがくりと頭を垂れる。
「手間を掛けさせやがる……いや、愉しませてくれるな」
部屋の左右の壁には幾つもの棚が作り付けられている。そのひとつから、浜村は細引き紐を持ってきた。紗良の長い栗色の髪を後ろで束ねて紐で縛った。その紐を引いて顔を仰向かせ、紐の端をワイヤーに結んだ。
紗良は、されるがまま。怯えの表情は消えて、諦めの無表情。
それが、浜村の気に入らないらしい。
「もっとシャンとせんか」
両手で紗良の腰をつかんで前後に揺すった。
「ぎゃあああああっ……！」
紗良が絶叫した。紗良は、細い鋼線がささくれ立ったワイヤーを跨がされている。折り曲げた膝にコンクリートブロックの錘を吊るされて、体重以上の重さが股間に、正確にいえば淫裂の奥底に掛かっている。そこを前後に揺すられれば――新たな鮮血が、紗良の内腿を伝った。
「おまえは父親が教会で説教したとき、介添えだか手助けだかで横に侍っていた。そして、父親の反戦的な言辞を咎めなかった。それに間違いないな」
「父は他人への博愛を説いただけです」
恵が驚いたほどはっきりと、紗良が言い返した。

「その他人には敵兵も含まれておるのだろう」
「……」
紗良が沈黙した理由が、なんとなく恵にもわかる。弓子先輩への尋問もそうだった。わずかな言葉の矛盾をあげつらって、真実をではなく、特高警察が望む通りの自白をさせようとする。そういうのは、たしか誘導尋問というのではなかったかしら。
「ふん。都合が悪くなったらダンマリか。二か月のうえも責められながら、懲りないやつだな」
浜村が制服の巡査に手伝わせて、平机を紗良のすぐ脇まで動かした。そこに幾つかの小道具を並べる。アルコールランプ、水を張った洗面器、そして三段の引き出しになった小箱。
「どこに何がはいっているか、おまえはよく知っているよな」
紗良を揶揄いながら、浜村がいちばん上の引き出しを開けた。
（……？！）
細かく区分けされた仕切の中には、長短さまざまな針が並べられていた。それが裁縫に使われるのでないことは、恵にも容易に理解できた。
針は短いもので五センチほど。長いものは畳針だろう、十センチ以上で針金よりも太い。
「まずは、これかな」
浜村は先の尖ったペンチで針を摘まんで、アルコールランプの炎にかざした。
「ひどい……」
思わず漏らしていた。

それを浜村が聞きとがめた。
「これは滅菌処置だ。バイ菌の怖さを学校で習わなかったのか？」
食中毒とか傷の手当とかは、もちろん習っている。けれど……それとこれとが同じ理屈だとは、思いもよらないことだった。
「ふん、こんなものか」
中頃までまっ赤に焼けた針を、浜村が紗良の胸に近づける。左手で乳首を摘まんで引き伸ばして――
「ぎびいいいいいっ……！」
髪を後ろに引かれて反り返っていた紗良の裸身が硬直した。
乳首を突き抜けた針が、かすかに煙をあげている。
「聖書の教えでは、右の乳首を刺されたら左の乳首も差し出すんだったな」
浜村が二本目の針を炙る。そして、もう一方の乳首を貫いた。
ふたたび紗良が絶叫して、全身を強張らせる。
「はあ……はあ、はあ……」
大きく口を開けて喘ぐ。
「敵兵にも情けをかけてやれと、父親は言ったのだな？」
「……」
数秒の沈黙の後で、紗良がぽつりとつぶやく。
「どう返事をしても、気が済むまで甚振るつもりなのでしょう」
二か月に及ぶ拷問で、それを紗良は身に沁みている。

「ふふん」
浜村は紗良の言葉を否定しなかった。どころか。
「ならば、つぎはどうされるか、わかっているな」
三本目に取り出したのは、いちばん長くて太い畳針だった。それを丹念に炙ってから、紗良の正面に立った。
「……鬼」
か細い声には怨嗟があふれていた。
「鬼手仏心と言ってもらいたいね」
浜村の左手が紗良の傷ついた股間をまさぐって、肉蕾をほじくり出した。それを摘まんで引き伸ばし、突き抜いた先がワイヤーに当たらないよう角度をつけて針を近づける。細い縫い針と違って、まだ全体が鈍く赤らんでいる。
ジュッという肉の焼ける小さな音を、たしかに恵は聞いた。が、すぐに紗良の咆哮に掻き消された。
「かゞわゞあゞあゞあゞあゞあゞっ……！」
紗良の裸身が反り返って、腰がビクッと跳ねた。その動きで、淫裂の内側をワイヤーにいっそう抉られる。
「ぎひいいいい……」
ずっと弱々しい悲鳴。悲鳴が立ち消えて、上体が後ろへ倒れかかる。
「おおっと……」
浜村が左手で乳房を鷲掴みにして引き戻した。

「……」

紗良は顔を仰のかせたまま、じっとしている。身じろぎひとつしても、淫裂を切り裂かれるだけなのだ。紗良のまなじりから涙がこぼれて、耳朶を濡らした。

無言。しかし恵には、紗良がすすり泣いているとしか思えなかった。

もしも、紗良先輩の言葉が事実なのだとしたら――自分も同じように、なにを白状しようとも拷問され続けるのだろうか。でも、弓子先輩も華江先輩も、こんなに残酷な拷問まではされなかった。扱いに差があるのは、罪の軽重なのだろうか。

ぞくっと、背筋を戦慄が奔り抜けた。自分の罪はなんなのだろう。そして、何を訊かれるのだろう。

あの冊子は発禁本。それも、きわめて危険なものらしい。主義者と決めつけられたくらいだ。

ふっとユリの顔が頭に浮かんで――恵は本能的に、それを打ち消した。

本屋で売っていない、手作りの粗末な冊子。どうやって、どこから、それを手に入れたのか。警察は、それを知ろうとするに決まっている。冊子の経路をたどっていけば、本物の主義者、その組織を摘発できる。

さいわいに――と、恵は思った。恵は男性のオルグと情を通じて、その男の好みで変態的な『下着』を着けていたと思われている。自分が黙っていれば、ユリお姉様に官憲の手が伸びることはないだろう。

あたしは、きっと紗良先輩みたいな残虐な拷問を受けるだろう。でも、もしもユリお姉様が捕まったら……お姉様は主義者なのだから、もっともっと非道い（それがどんなもの

か想像もつかないけれど）拷問に掛けられる。あの美しいお姉様の身体が痣だらけになって、刃物で切り刻まれて……お股も……

「すでに国外追放された父親のことは、さておくとして」

浜村の声で、恵は物思いから引きずり出された。

「おまえ自身のことを尋ねよう」

針を入れている段を引き抜いて、長手方向に仕切った中からおそろしく長くて太い針を取り出した。長さは二十センチを超えている。頭の側に穴が明いていなければ、恵は金串かと思っただろう。

それをペンチで摘まんでアルコールランプの炎で炙りながら、浜村が問いかける。

「おまえたち邪蘇（ヤソ）教の信者は、この世の者ならぬ神の命令に従うそうだが、それを……」

そこで浜村は一瞬、直立不動の姿勢をとった。

「国体への反逆とは考えんのか」

紗良は、弱々しく頭を振った。

「何度も申し上げました。良き為政者は、神の御教えにそむくような統治は行ないません。神の御命令に従うことと、御国の命令に服することは、同じなのです」

「何度聞いても、国の命令が神の教えと相反しているときには反逆するとしか聞こえんぞ」

「神の御教えに従いながらも次々と不幸に見舞われたヨナのごとくに、神の顕わす事蹟は人間には理解できません。わたくしたちは、ただ受け容れるだけです。御国の命令も、同じことだと思います」

今にも息絶えそうな風情にもかかわらず、紗良は力強く言い切った。

これが宗教の力というものだと、恵は感動した。逆さ磔で海に没しようと、裸に蓑を着せられて油を掛けられ火刑に処せられようと、けっして神を捨てなかった人たち。

紗良への仕置は、そこまで残虐ではなかった。いや、生命を奪わずに拷問を繰り返すのだから、かえって悪逆非道なのかもしれない。

浜村が、紗良の乳房をつかんで固定した。その根元に灼熱した針を近づけて。

「きひいいいい……」

意外にも、紗良の悲鳴は小さかった。だけに、肉の焼ける音が掻き消されることもなかった。

両手を吊られている恵は耳をふさぐこともできず、しかし、顔をそむけるのはかえって怖く思えて、もしかすると明日にでも自分も同じ拷問を受けるかもしれないと胸つぶれる思いで、惨劇を凝視するのだった。

肩で荒い息を繰り返している紗良を尻目に、浜村が二本目の針を熱しにかかる。

「邪蘇教を捨てろとは言わん。国民であるからには、なににも先んじて国の命令に従う。そう誓うだけで、赦してやるぞ？」

紗良は、また力無く頭を振った。

「赦すとは、その針のことですか。わたくしが何をどう答えようと、死ぬまで甚振るつもりなのは、わかっています」

それは紗良先輩の被害妄想ではないだろうか――と、恵は疑った。警察は真実の自白を求めているのではなく、自分たちに都合の良い自白、被疑者をできるだけ重い罪に問えるような自白を求めているらしいとは、わかってきた。けれど、警察が望むがままの嘘の自

白をして、それでも拷問が続くなんて、あり得ない。
そもそも自白を引き出すのが目的ではなく、若い娘を肉体的にも精神的にも痛めつけること――拷問そのものが目的の拷問があるということを、恵は知らなかった。いや。拷(たた)いて問うのではなく、拷(たた)いて悶えるのを加虐者どもが愉しむのだから、『拷悶』と表記すべきか。
「どうあっても罪を認めず、妄言を繰り返すのみか。ならば、いっそのこと、しゃべれなくしてやる。申し開きをするなら、いまのうちだぞ」
「……」
「ふん。強情なやつめ」
浜村がズボンに手を突っ込んで、白い布を引きずり出した。一端には細い紐が縫い付けられている。幅は三十センチ、長さは一メートル弱。紐の縫い付けられている側から三十センチほどのあたりが黄色く染みていた。
「一日半も着けておると、汚れが目立つな」
黄色く染みた部分で折り返して大きな結び瘤を作った。
「口を開けろ」
口元に近づけられた布から顔をそむけて、紗良は唇を引き結んだ。
浜村は左手で紗良の頭髪をつかんで顔を引き戻し、猿轡を握った手で腹を殴った。
「ぐぶっ……うえええ」
紗良が口を薄く開けて、唇の端から少量の胃液をこぼした。そこへ猿轡が押し込まれた。
「むぶうう……げふっ。ぶふうっ！」

吐き出せなかった胃液を誤嚥したのか、激しく咳き込む紗良。
浜村は容赦なく結び瘤まで口の中に詰め込んだ。紐を顔に巻き付けて、頬がくびれるまで絞り上げてから結び留めた。
紗良を苦しめていたコンクリートブロックの錘を床に下ろして、足首と腿を縛っていた縄もほどく。
壁に立て掛けてあった竹竿を取って、恵の正面に立つ浜村。
「……」
自分が敲かれるのかと、両腕と片足をひとまとめに吊り上げられている身をすくませた恵だったが。
浜村は竹竿の先を天井に向けた。竹の先に着いている鉤で、恵を吊っている滑車のすぐ横にあるもうひとつの滑車からも綱を引き下ろした。その端を紗良の片足に縛りつけると。
「淀江巡査。キミも手伝え」
記録係の巡査に綱を引っ張らせる。
「んん……むぶううう……」
足首を後ろへ引っ張られて、紗良の後ろ手に緊縛された裸身が前へ傾く。髪をワイヤーにつないでいる細引きがほどかれると、一気に前へつんのめった。
「ぎぃぃぃぃっ……！」
グラリと横に倒れて、淫裂をしたたかに抉られながら、紗良の上体がどさりと床に投げ出された。すでに股間から鼠蹊部までが鮮血に染まっている。
さらに縄が引かれて上体も床から浮き、斜めに傾いだまま、恵の目の前で紗良の裸身が

ゆっくりと回りながら吊り上げられていく。紗良は自由なほうの足を折り曲げて、わずかでも股間を隠そうとしているのか、身体の釣り合いをとろうとしているのか。髪にコンクリートブロックが結び付けられて、上体の傾きが小さくなる。

浜村が、紗良の折り曲げている足をつかんで引き伸ばした。横に引いて開脚させ、恵を吊っている綱に足首を結び付けた。滑車との位置関係で、恵とは直角に並ぶ形になった。

恵にしてみれば、せいぜい五十センチの至近距離から紗良の股間を覗き見ることになる。間近に眺めると、淫裂に向かって放射状に刻まれている線刻は刃物の傷ではなさそうだった。傷は浅いが、縁がギザギザに裂けていた。これでは後々まで肌に醜い痕が残るのではないだろうか――女の身としては、まずそれを思ってしまう。

「今朝の有刺鉄線は、さぞ堪(こた)えただろうな」

恵の眼前で、浜村が傷を指でなぞりながら言う。あるいは、恵に聞かせる意図があるのかもしれない。

「二番煎じは芸がないし、これ以上に傷を増やすと使い心地も悪くなる」

浜村がうそぶきながら、壁に立てかけてある竹刀を手にする。

「こいつには、おまえも慣れっこになっているだろうし……」

ピタピタと紗良の股間を軽く叩く。

（……？！）

紗良を開脚で逆さ吊りにした意味を悟って、恵は気が遠くなりそうだった。

「荒島課長殿に神崎古流目録の技前を披露いたしましょう」

竹刀を戻して、壁に掛けてあるサーベルをとった。警官が巡邏のおりに携行する官給品

だ。
「神崎古流とは聞かぬ名だが？」
壁際の小机の横に折りたたみ椅子を広げている課長が、たいして興味もなさそうに尋ねた。
「古武術研究会は、女を甚振る技ばかりを研鑽しているわけでもありません。今の世に埋もれている武術にも取り組んでいます。ごく一部の会員は、ですが」
流派の女人が素裸で仇討の場に臨み、不可思議の技を使ったという言い伝えがなければ、小生も手を染めはしませんでしたが――と、浜村が言い足した。
「それはともかくとして……」
浜村が抜刀して、サーベルを正眼に構えた。
「生き胴を縦真っ二つに斬り裂く自信はないが……」
淫裂に刃を埋めてから、ゆっくりと振りかぶった。ひと呼吸、ふた呼吸と気息を整える。
紗良が全身の筋肉をこわばらせる気配が、同じ縄に縛られている恵にも伝わってきた。しかし、紗良は命乞いをする気配も無い。たとえ猿轡をされていても、声をかぎりに呻くとか身をもがくとか、無駄な足掻きではあっても、そうするのが当然ではないだろうか。一瞬の苦しみさえ我慢すれば安息を得られると考えているのかもしれない――とは、死というものを本気で考えたことのない恵には思いもよらなかった。
「きええいっ！」
気合声に、恵は反射的に目を固く瞑った。しかし、肉を斬り骨を絶つ音（それがどんなものか、恵は知らないが）は、聞こえてこなかった。

おそるおそる目を明けると、サーベルは淫裂を切り裂く寸前で、ピタリと止まっていた。
ほおおおっと息を吐いて、恵の膝が砕けた。が、吊り上げられた太腿に髪を縛りつけられているので倒れることもなく、頭上に引き上げられている手首に縄が食い込んだだけだった。
「こら、起きろ。まだまだあの世には逝かせてやらんぞ」
浜村が足を挙げて、靴の裏で紗良の顔を軽く蹴った。それでも失神から醒めぬと見てとると、後ろへまわって、肩甲骨のあいだに踵を蹴り入れた。
「〝もぶっ……」
紗良が息を吹き返した。
「今のは小手調べだ。もうちっと、小手調べを続けてやる」
浜村が元の位置に戻って、ふたたびサーベルを構える。
「きええいっ！」
白刃が閃いて。
「〝んいいっ……！」
今度も切っ先は淫裂の手前で止まったが――内腿の肌を薄く削いでいた。ハンカチを四つに折ったほどの面積が桃色に変じて、すぐに血で染まった。
「これでは片手落ち、いや片脚落ちか」
みたび白刃が降り下ろされて、反対側の内腿にも同じ傷が刻まれた。両腿の傷がごく浅く、血には染まっても滴るほどの出血でもなかった。
「では、ぼつぼつ引導を渡してやろう」

浜村がサーベルを今度は大上段に構えた。いっそう深甚に気息を整えて。
「きええいっ！」
びゅんっと、刃が空気を切り裂いて。
びじいっ！
これまでにない異様な音が、固く目を閉じている恵の耳を打った。
「んぶっ……」
紗良は短く呻いて――全身から脱力したのが、恵に伝わる。
「浜村クン、床が汚れるぞ」
荒島課長の、のんびりした声。
身体を真っ二つに切断したら部屋中に血が飛び散ってあたりまえ――恵は薄く目を明けて床を見た。赤い色は見えなかった。かわりに、小さな水たまりができていた。音も立てずに雫が滴っている。
（……？）
視線を上げていくと――数秒前と同じ、無惨に傷ついてはいるが五体満足な裸身がそこにあった。
峰打ちという言葉が頭に浮かんだ。でも、ちゃんと刃筋を下に向けて振り下ろしたのに？
斬撃の寸前で刃（やいば）を返すのが正しい峰打ちだとは、恵は知らない。最初から刃を返していたのでは、相手は「たかが鉄の棒」と思って突っ掛けてくる。斬られたと相手が思えばこそ、「安心せい、峰打ちじゃ」という（チャンバラ映画の）セリフが生きるのである。それはともかく。

紗良は失禁したのだった。刀の峰はしたたかに淫裂に食い込み奥底を打ち叩いていた。大根や南瓜なら、峰打ちでも簡単に両断できるのだから――紗良はほんとうに斬られたと思って当然だった。もしも浜村が手首を絞って刀勢を殺さなければ、女として二度と役立たなくなるか、あるいは生涯松葉杖を必要とするくらいの怪我はしていただろう。

「おっと……粗相の始末は当人にさせましょう」

浜村は、コンクリートブロックに結びつけている紗良の髪をほどいた。肩が床に着くまで、足を吊っている縄を緩める。片膝を突いて紗良の顔を両手でねじって、口からはみ出ている猿轡の布を水溜りに押し付けた。それでも残った汚れには、髪を広げて、それを靴で踏みにじって拭いた。

「これくらいでよろしいでしょうか。どうせ、血痕などもこびり付いていることですし」

床には、木目にしては不自然な黒い大小の染みが、あちこちに散っている。つまり、廊下の突き当りにあるこのひときわ広い部屋は、取調室というよりは拷問部屋なのだった。あるいは処刑室をも兼ねているのかもしれない。

「うむ。今日の取り調べは、ここまでとするか」

荒島課長が椅子から立ち上がって、恵の前に立った。

「その前に――こいつの素顔を見ておくとするか」

奇妙なことを言うと、恵が訝ったのは一瞬。股間を縦に縛している荒縄が緩められて、言葉の意味を理解した。羞ずかしいという感情は――まさに目の前、わずか五十センチの距離に現出した惨劇に胆をつぶしている恵には生じなかった。

荒島がわずかに腰をかがめて、ほとんど一直線に引き伸ばされている股間を上から覗き

込んだ。
「これだけ大股広げても、たいして具がはみ出ておらんな」
割れ目からチョコンと顔を覗かせている肉襞を指でつまんで引っ張られたのだから、男がなにを言っているのか、恵にも明白だった。そういえば――紗良先輩のそこは、割れ目に鶏冠のような肉がかぶさっているから、血の色とあいまって薔薇のようにも見える。自分も、あんなふうになるまで拷問されるのだろうか。
指が淫裂の中にまで押し入ってきた。下腹部の奥底をつつかれる、かすかなくすぐったさを交えた不快感。が、鋭い痛みに変じた。
「痛いっ……」
指が引き抜かれた。
「おっと。傷物にしてしまうところだった……いや？」
荒島が首をかしげた。恵はとっくにオルグの男と情を通じていると聞かされていた。指一本で痛がるとは不可解だった。しかし、二度目でも痛みを訴える例はあることだし――青二才なら姦遂前の不面目もあるだろう。そんなふうに荒島は解釈したのだろう。すぐに関心を当面の贄に転じた。
恵はといえば――弓子先輩と華江先輩が男に犯される場面を見ているから、荒島の言葉の意味は明白だった。自分は傷物にされないということだろうかと、かすかな希望と圧倒的な疑問とが浮かぶ。
しかし、紗良への最後の仕打ちを目撃して、そんな疑問など吹っ飛んでしまった。
恵が吊るされている縄に結ばれていた紗良の片足がほどかれて、膝頭を合わせて縛り直

された。そして、縄の結び目が滑車に当たるまで、いっそう高く吊り上げられた。猿轡の紐がほどかれ、自身の小水を吸った越中褌の布が引き出される。紗良は口を半開きにしたまま、気絶している。

荒島がズボンを脱いだ。その股間には、幼い頃に父と入浴したときの記憶にある通りの形状をした肉棒が垂れている。荒島は、それを握って前後にしごいた。たちまち、肉棒は凶悪な形に姿を変えた。そうか、こんなふうに男の器官は変化するのかと――混乱と絶望のさ中にあっても、性的な好奇心を覚えた恵だった。と同時に――この人はなにをするつもりかと、訝った。紗良先輩の股間は、恵の頭よりも高い位置にある。弓子先輩や華江先輩と同じように辱められるわけではなさそうだ。

荒島が尋問用の平机の下に置かれた脇机の引き出しから、奇妙な物を取り出した。太くて短い竹筒に見える。それを、自身の股間にあてがって、怒張に嵌めた。竹筒には節が無く、肉棒の半分ほどが突き抜けた。

荒島は紗良の正面に立つと腰をかがめて――怒張をその口に突き挿れた。

（ま……？！）

乃木が華江の口元に怒張を押し付けた光景を思い出して、こういう意図だったのかと、恵は悟った。竹筒は――華江よりも反抗的な紗良に噛みつかれないための用心だろう。恵だって、男にこんな狼藉をはたらかれたら、噛みつくどころか食いちぎってやる……だろうかという疑問も湧いた。

恵は、まだ犯されていないし、敲かれてもいない。けれど、じゅうぶんに辱められたという思いに打ちのめされている。明日からと予告されている『取り調べ』では三人の先輩、

とりわけて紗良先輩のように拷問されるのだろう。男に噛みついて怒らせるような真似は、恐ろしくて出来っこない。

そんな葛藤を嘲笑うかのように、荒島が激しく腰を動かしている。いっそう腰をかがめて突き上げるようにしたり、逆に上から押し付けるようにしたり。亀頭を口蓋や舌にこすりつける動作とまでは理解できなかったが、性器同士の結合よりは、はるかに女を貶め辱める行為だと思った。

十分ほども、荒島は意識の無い紗良の口腔を蹂躙してから。不意に身を引いた。紗良の半開きの口から、白い液体がこぼれた。

浜村が紗良を抱きかかえて、首の根元を手刀で軽く叩いた。コクンと、紗良の喉が動く。口中に残った液体を嚥下させたらしい。

「お人形を虐めても面白くありませんのでね」

後ろから肘を紗良の腰にあてがって、強く押した。活を入れられて、紗良が息を吹き返した。

「こら、口を閉じるんじゃない。開けろ」

まだ意識が朦朧としている紗良の唇に、これは初手からいきり立っている怒張を押し付けた。

「今日の身代わりは、新入りの瀬田恵だ。見てのとおり、直立前後開脚で吊ってあるから、おまえと同じように鉄鞭を叩き込んでやるか」

紗良はチラッと恵を見てから、大きく口を開けて浜村を頬張った。わずかに上体を折り、顔を突き出して根元まで咥え込んだ。モゴモゴと口を動かし始める。

恵は、ユリとの濃厚な接吻を想起した。互いに舌を絡ませて、互いを貪る。それが、この場では一方が舌ではなくて……

なんて不潔で破廉恥な――と思ってから。浜村の恫喝の意味に思い至った。紗良は、たとえこの一瞬だけでも恵に危害が及ばないようにと、我が身を犠牲にしているのだった。

ズヂュウウウ……音を立てて、紗良が肉棒を啜っている。啜って、また口をモゴモゴと動かして。逆さ吊りにされたまま、頭を前後に揺すっている。

紗良は新学期が始まる前に逮捕されて、すでに二か月の余も取り調べに名を借りた弄虐が続いている。そのあいだに仕込まれた仕種なのだろうが、それを命じられるより先に、自発的に行なっている。もちろん、彼女の本意ではない。股間を鉄鞭とかで叩かれる痛みを知っているだけに、たとえ面識のない後輩といえども、同じ目に遭わせたくないという――自己犠牲だった。

立場が逆だったら――峰打ちではなく、ほんとうに紗良先輩を真っ二つにしてしまうと脅されても……果たして、自分は同じようにできるだろうかと、恵は自省してしまう。もしも、紗良先輩ではなくユリお姉様を殺すと脅されたら――怒張を頬張り懸命に奉仕する紗良先輩の姿と自分とが重なって、むしろ後ろめたさを覚えてしまう。紗良先輩とユリお姉様、二人の命に軽重は無いはずなのに――と。

浜村が、ユリから離れた。

「ちゃんと飲み込めよ」

紗良が口を閉じて嚥下するのを見届けながらズボンを引き上げた。

「どうも、下帯が無いと収まりが悪い」

浜村の越中褌は猿轡に使われ雑巾にもされて、唾液と小水にまみれている。
「淀江巡査、キミも相伴にあずかれ」
「はいッ、ありがとうございます」
若い巡査は悪びれるふうもなく、しかし上司の上司たる荒島の臨席とあっては喜色を抑えるくらいの分別をはたらかせて、紺サージのズボンをずり下げる。先の二人とは違って、下は六尺褌だった。袋状に堅く股間を包む前袋が、若さに負けてはち切れんばかりに盛り上がっている。もどかしそうに褌をほどくと、最上級者に倣って竹筒を装着した。
紗良は、これも浜村にしたのと同じくらい熱心に奉仕して、浜村の半分も時間をかけずに終わらせた。立て続けに三人から口淫を強いられ、ことに二人には積極的に奉仕したせいで――というよりも、元から紗良は気力も体力も限界を過ぎていた。口からこぼした白い液が鼻に伝って、紗良は弱々しくむせながら、吊るし切りにされようとする鮟鱇さながらにグッタリしている。
「もう四時か……」
荒島が腕時計を見て、それから吊るされている二人の少女に目をやって。
「世間では半ドンだから、これくらいにしておくか。浜村クン、その娘の手当をしてやってくれ」
これだけひどい傷を負わせておきながら医者を呼ばないのかと、恵は驚いたのだが。
「こいつは、もういい加減に飽きているんですがね」
「何を言う。職務に否応があるか」
「へいへい」

言葉とは裏腹に、浜村はいそいそといった態で、紗良の両膝を縛している縄をほどいた。吊られていないほうの足が、自然と前へ折れて、大きく開脚した姿になった。

浜村が棚から太い蝋燭を持ってきた。すこし短くなっているが、神社やお寺の大きな催しでしか見たことのない百匁蝋燭だろうと、恵は見当をつけた。こんなに明るいのに蝋燭？

浜村は二本まとめて火を点けると、両手に持った。それを逆さ吊りにされている紗良の上にかざした。

なにをするつもりかと――恵は不安の塊りになりながら、目をはなせない。

十秒ほども経っただろうか。浜村が二本のロウソクを傾けた。くぼんだ燃え口に溜まっている熔けた蝋が、ボタタッと股間に落ちた。

「んんっ……」

紗良が身をよじった。

「熱い……」

熱湯よりも熱い蝋を、女性のもっとも敏感な部位に垂らされたのだ。自分だったら泣き叫んで大暴れしているだろうと、恵は思う。浜村という男の言葉では、紗良先輩は何度もこんなふうに責められているらしい。それで馴れている――わけでもないだろう。こんな目に遭わされても泣き叫ぶことさえできないほど、衰弱しているのだ。その証拠に……

「きひいっ……熱い……ひいいいっ……」

熱蝋が垂らされるたびに、紗良は憐れに呻き、かすれた悲鳴をあげている。

肌に蝋を垂らされているのではないと、恵は思い当たった。肌にではなく傷口に、なのだ。

荒島が『手当』といった意味を、恵は理解したくなかったが理解してしまった。古釘を踏み抜いたときには傷口に穴明き硬貨を置いて、ライター油を垂らして火を点けるのが良いという話を聞いたことがある。そうしないと破傷風に罹る恐れがある。

つまり――これは拷問ではなくて、殺菌消毒の処置なのだろう。もちろん、こんな乱暴なやり方をするのは悪意以外の何ものでもない。

「くうう……きひいっ……熱い……」

破傷風はすごく痛くて苦しいという。それを知っているから、紗良先輩も「やめてください」とは訴えないのだろう。

もちろんそれは、二か月以上に及ぶ拷問と強姦を体験していない恵の的外れな推測でしかなかった。じきに恵も、反抗はおろか哀願さえも、いっそうの残虐を招くと我が身ですることになる。

浜村は十分ほどもかけて、股間を埋め尽くすまで熱蝋を垂らし、さらに全身に刻まれた鞭傷や打ち身にまで蝋を滴らせた。大量の蝋を熔かしたせいで、半日は持つはずの百匁蝋燭が短時間で半分ほどにもなった。

「これで、傷が膿む心配は無いはずです」

浜村が蝋燭を消したとき、紗良の傷だらけの裸身は蝋で埋め尽くされていた。

「ご苦労。キミが配属されてから、嘱託医を呼ぶ回数がグンと減って助かっておるよ」

「浮いた経費の一部を報奨にくださっても、罰(ばち)はあたりませんよ」

「何を言う。キミこそ、他の誰よりも役得にあずかっておるではないか」

「それは浅利巡査部長も御同様ですが。ま、女は天下の回りもの――いや、輪姦(まわ)し者とい

いますから」
「うまいことを言うな。ところで……」
荒島が目に粘っこい光をたたえて恵の裸身を見た。
「明日は日曜だが、特高警察は軍隊と同じで月月火水木金金だ。徹底的に取り調べてやるとしよう」
「勘弁してくださいよ」
浜村が、にやつきながらぼやくという芸当をしてのけた。
「たまには女房孝行をしてやらんと、家庭内争議になりかねませんや」
「ここへ細君を連れてきてもかまわんぞ。この瀬田恵と並べて鞭の百もくれてやれば、上も下も随喜の涙じゃないのかね」
剣呑というか物騒というか、恵には理解できない会話が続く。
「まさか、警視殿の目の前で公私混同もできませんです。三つに折りたたんで縛って、擂粉木の二本もぶち込んでから箱詰めにでもしておきますよ」
この部屋に連行される前だったら、恵にはその情景を想像することはできなかっただろう。しかし今は――椅子に植えられた擂粉木と丸ヤスリ。顎と足首が接するまで身体を折り曲げて緊縛されていた華江。そういった残虐を目の当たりにした今は、その姿がまざまざと目に浮かぶ思いだった。この人は、あたしを怖がらせようとして、わざと言っているのではないだろうか。そこまで思ってしまった。
「ほどほどにな。特高警察の警部ともあろう者が、猟奇趣味が高じた挙句の細君殺害など、儂でもかばいきれんぞ」

「なに。そのときは箱詰めのまま、県特別高等警察課思想犯掛に送りますよ。そのときは、善処方よろしくお願いします」
真面目くさって、浜村が頭を下げる。さすがに、荒島は茶番につきあわない。
「淀江巡査、その二人をぶち込んでおけ。人手を借りてもかまわんぞ」
「いえ、小娘の一人や二人、他人の手を借りるまでもありません」
官吏の最下級である巡査が手を借りるとしたら、より下層の雇人か、せいぜい同輩までになる。課長のお墨付きとはいえ同輩をこき使うのも憚るし、雇人などあることないこと噂を撒き散らしかねない。それに――上司の薫陶よろしく嗜虐に目覚めつつある若者には、愉しみを独り占めにしたいという思いもあった。その愉しみが後ろめたいものであれば、なおさらだった。
二人の上司が立ち去った部屋で、淀江巡査は二人の少女を床に下ろした。
恵は長時間片足で立たされていたにしても、気力はともかく体力はまだじゅうぶんに残っていたから問題は無かったが。紗良はあお向けに倒れたまま、脇腹を蹴られようと乳房を踏みつぶされようと、ピクとも動かない。
淀江は紗良を叩き起こすのは諦め、うつ伏せにして８の字形の手枷を後ろ手に嵌めた。立っている恵にも同じように手枷を嵌めると、紗良を抱き上げて恵に背負わせた。恵の後ろ手をねじ上げて、両腕のあいだにあお向けにした紗良を押し込み、紗良の両腕は恵の肩を越えて前に垂らされた。
ズルズルと、紗良が恵の背中から滑り落ちる。淀江は紗良の裸身を押し上げて、二人の胴を荒縄で縛り合わせた。そして、最初から考えていたのかその場の思いつきか、紗良の

手枷にも荒縄を巻いて、恵の股間を通して後ろへ引き上げた。
「留置房までだ。これで問題なかろう」
二人の胴を縛り合わせている荒縄に捕縄を巻き付けかけて、淀江はニヤリと笑った。
淀江の手が恵の乳房に伸びた。特高警察の残忍ぶりに怯えて、恵は抗議の言葉も出てこない。乳房をつかまれ乱暴にこねくられても、痛みよりは恐怖が喉をふさいでいる。
ピョコンと突き出た乳首を淀江が摘まんだ。
「ついて来い」
恵をドアに向かって引っ張る。
恵としては、乳首を引っ張られる方向へ歩くしかない。紗良を背中で引きずっているので、自然と前かがみになる。歩みもとどこおって、いっそう強く乳首を引っ張られる。
「くうう……」
ズリッ……ズリッと、紗良を引きずる感覚が背中に伝わる。一歩一歩を踏ん張って、廊下を歩く。さいわいに、取調室からもっとも近い――留置場のいちばん奥が、少女たちの雑居房になっていた。歩かされる距離が短かったことよりも、連行されてきたときのように他の被疑者（とくに男性）の目に曝されないことがありがたかった。
二人を結び付けている荒縄がほどかれて、まず恵が留置房の中へ突き飛ばされた。
「きゃ……」
つんのめって、両手を使えないので釣り合いをとれずに転んでしまった。無意識に身体をひねって、顔から突っ込むことだけは避けられた。肩を打ってその場に倒れている蕾の上に、意識の無い紗良の裸身が放り込まれた。

ガチャン。
鉄格子が閉じられて淀江が立ち去ると――華江と弓子が恵を助け起こした。といっても、後ろ手に手枷を嵌められている。後ろ向きに座り込んで、手探りで紗良を床に寝かせてから、恵がにじり起きるために背中で壁を作るのが精一杯だった。
「ありがとうございます」
きちんと礼を述べてから、恵は気づかわし気な視線を紗良に向けた。
「ひどい怪我です。お医者様は来てくれないのでしょうか」
取調室での荒島と浜村の会話から、そうと察していても、尋ねずにはいられなかった。
華江が首を横に振った。
「稲枝さんは……責め殺される運命なんだ」
「そんな馬鹿なことって……！」
「うるさいぞ！」
怒鳴り声が廊下に響いた。留置房全体を見張っている者がいるのだと、初めて恵は知った。
「責め殺されるなんて……警察が自白させたがっていることを何もかも――濡れ衣だろうとなんだろうと認めても、それでも殺されるってことですか？」
声をひそめて、恵は尋ねた。世間に名の知られた主義者の作家が、捕まるなり拷問で殺されたという噂は耳にしたことがある。見せしめなのだろう。けれど、名もない娘を責め殺すなんて、理由がわからない。
「稲枝さんの父上が国外追放になったことは、知っているね？　その後で母上も逮捕され

て、刑務所に入れられたことは？」
「お父様のことは知っていました。でも、お母様まで……」
「父上が主犯とすれば、母上は従犯だ。紗良さんは、どんなにこじつけたところで幇助が関の山だ。年齢のことも考えると、短期の教護院でも重すぎるくらいだ」
「それなら、どうして……」
逮捕されたのだろう。華江先輩や弓子先輩よりもずっと厳しく責められているのだろう。
「あいつら、変態性欲者の集団なんだ」
ささやくような声だったが、憎悪が噴き出していた。
「自分らはどこにでもいる若い娘に過ぎないが、紗良さんは違う。まるで西洋人形みたいな容姿だろ。珍しい玩具なんだ。生きている人形、変態性欲者どもの生贄にされているんだ」
「……」
今日の数時間だけでも、華江の言葉を裏付けるような男たちの言動を何度か間近に見聞きしている。けれど、信じられなかった。御国の秩序と安寧を維持するという崇高な職務に就いている人たちが、罪もない婦女子を捕らえて弄び、あげくに口封じをするなんて。
「あたしたちは、違う扱いを受けるんでしょうか？」
珍しい玩具だから、二か月以上も弄ばれている。けれど、珍しくない玩具は……
「きみの取り調べは青谷っていう男がするそうだね」
華江が話題を変えた――のではなかった。
「あいつの胸先三寸さ。自分の命運は乃木ってやつに握られている。弓子さんは、あの助

平ったらしい大岩に」
取り調べを担当する刑事が容疑者の運命を左右するというのは、わからなくもない話だった。けれど、華江の言葉にはもっと深い意味があるように思えた。
「自分だって、確信があるわけじゃない。でも、そんなことを匂わされて……くそう、男になびいて生きるなんて、絶対に厭だ。それくらいなら、責め殺されたほうがましだ」
「うるさいぞ。懲罰を食らいたいのか」
看守が房の前まで来て、六尺棒を鉄格子のなかに突き入れた。
華江が、後ろに下がって棒先をかわす。
巡査は鍵を開けて房内に踏み込むと、華江を壁際へ追い詰めてから、六尺棒で乳房をこねくった。抵抗の無駄を知っている華江は、蹂躙からさらに逃れようとはしなかった。巡査を睨みつけるでもなく見詰めて、されるにまかせていた。
巡査は取調室の連中とは違って、しつこく華江を痛めつけようとはせず、すぐに六尺棒を引いた。
「つぎに騒いだら、特高課長殿に報告するぞ」
恵は、それを脅し文句だと受け取った。特高課に拘引された被疑者には一般の警官は迂闊に手出しできない――という意味もあるとは気づかなかった。

・勾留初日の夜

薄っぺらい畳、あるいは分厚い筵（むしろ）のような敷物が、はいって右側にだけ並べられている。左側は剥き出しのコンクリート床だった。

弓子はその敷物の端にうずくまって、華江と恵が話しているあいだも自分の殻に閉じこもっていた。華江も、巡査に追い詰められた壁際から十センチほどにじり進んで、立てた膝に頭をうずめて、もう恵に話しかけようとはしない。紗良は、まだ意識を取り戻さない。

恵は紗良を気づかいながらも、どうすることもできず――敷物の端に、華江とも弓子とも距離を空けてへたり込んでいた。

やがて廊下に人の気配がして。カチャカチャと、硬い物が触れ合う小さな響き。

「三十七番、四十一番、四十二番、五十三番……」

声がするたびに、小さな返事が聞こえてくる。三十秒ばかり声が途絶えて、また点呼が繰り返される。今度の返事は女性ばかりが四人。そして、巡査と前掛け姿の老人と背の高い手押し車とが姿を現わした。

「思想犯容疑者――一千三百七十六番、一千三百八十五番、一千三百八十六番」

恵たちと向かい合っている房の中から返事は聞こえるが、男の姿は見えなかった。そういえば――と、恵は遅まきながら気づいた。房に戻されてから、この三人の姿を見た記憶がなかった。房の奥に引っ込んでいたのだろう。もしかすると、女性の裸身を直視しない

よう気づかってくれているのかもしれない。
巡査が恵たちに向き直った。
「女子思想犯容疑者――二千四番」
帳面を繰って、番号を呼ぶ。
「はい……」
弓子が顔を上げて、か細い声で返事をした。
「二千五番」
「はい……」
華江も素直に返事をする。
「以上の二名は特別配給食だ。たっぷり滋養を摂って、明日に備えておけよ」
前掛けの男が、鉄格子の下にある差し入れ口から二つの盆を押し入れた。小さめの丼に山盛りの麦飯と干物の魚と青菜のお浸しと玉子焼き。大きな茶碗にいれられた水のほかに牛乳瓶が載っている。
「つぎ、二千六番」
恵は自分の番号を忘れていた。呼ばれたのが自分なのか紗良なのか、わからない。
「二千六番。飯はいらんのか」
「瀬田さん」
小さな声で華江にうながされて、間違っていたら罰を受けるのだろうかと怯えながら、返事をした。
「はい……」

「おまえは普通食だ」
玉子焼きと牛乳が無かった。ご飯の量も少ない。
押し車が引き返しかける。
「待ってください」
急に立ち上がったのでまた転びそうになりながら、恵は鉄格子に身体を押し付けた。
「稲枝さんが、まだ食事をもらっていません」
止まりかけた押し車を手で追い払って、巡査が戻ってきた。
「二千一番のことか？」
床に突っ伏している紗良に向けて顎をしゃくった。
「そいつは、昨日から飯抜きだ。何度かの絶食でだいぶん身体が引き締まってきたが、まだ乳も尻も大きすぎるそうだ」
「そんな……」
二日間の絶食。それも、過去に何回も同じことをされている。
「死んでしまいます。こんなに怪我をさせられて……すこしでも体力を回復しなければならないのに」
「心配いらん。ちゃんと蛋白質と水分は与えておるという話だ」
「……？」
巡査が踵を返した。その背中に向かってさらに声をかけるだけの蛮勇を、恵は持ち合わせていなかった。
「他人のことを思いやる余裕なんか、すぐになくなる」

華江が鉄格子に近寄って後ろ向きに座り、金属の盆を引き寄せた。手探りで牛乳瓶の蓋を開ける。瓶が倒れて牛乳が盆の中にあふれた。

「チッ……」

男みたいに舌打ちして、華江が腹這いになった。盆の縁に口をつけて牛乳を啜った。後ろ手に拘束されているのだから、他に方法はない。

弓子も敷物の上を這ってきた。同じように後ろ向きに座り直し恵の盆を脇へ押しやってから向きを変えて上体を倒し、頭を鉄格子に押し付けて前へつんのめるのを支えながら、顔を盆に近づける。そして、麦飯にかぶりついた。

浅ましい――どうしても、そう思ってしまう。けれど。紗良先輩ほどではないにしても拷問で痛めつけられた身体を養うためには、犬食いも仕方がないのだろう。

恵は紗良の様子をうかがった。意識は、まだ回復していない。傷は蝋に覆われて、出血は止まっているように見える。

「稲枝先輩……」

声を掛けても反応は無い。恵は紗良ににじり寄って、他に方法を思いつかなかったので膝頭で身体を揺すってみた。何度か繰り返すうちに、紗良が身じろぎをした。

「……」

紗良が目を明けて、恵を見上げた。

「あの……差し出がましいようですが。よろしかったら、あたしのご飯を食べてください」

「やめろ！」

華江が小声で鋭く叱責した。

「見つかったら、どっちも罰を受ける。看過した自分たちまで連帯責任を問われるんだ」
他人のことを思いやる余裕なんかなくなる――華江の言葉を思い出した。
「でも……あたし、ちっとも食欲がないから。見つからなければいいんでしょ。先輩、早く食べてください。せめてひと口だけでも」
食欲がないというのは、ほんとうだった。級友や先生の面前で裸にされて、しかも下着ともいえない変態的な装いまで暴露されて、縄で縛られて街中を引き回され、挙句に先輩が強姦される場面や残虐極まりない拷問を受けるところまで目撃を強いられて――まだ正気を保っていられるのは奇跡にも思える。
紗良がゆっくりと首を振るのが恵の目に映った。
「飢えを強いられて死ぬとしても……それは運命です。運命に従っても、神様の教えにはそむきません」
そうか、紗良先輩はキリスト者なのだ――と、恵は知った。
白薔薇聖女学院の名前が示すように、学院の背景にはキリスト教がある。だから恵も、ある程度は聖書の教えに親しんでいた。みずから命を絶つことを、神はお許しにならない。けれど、迫害に抗うのでなく受け容れるのは、崇高な行ないなのだ。そして、紗良先輩は（いや、あんな目に遭わされれば誰だって）生き地獄から逃れたいと思っている……
恵は口を閉ざして、筵の上に座りなおした。全裸で手枷まで着けられた身であっても、取調室で拷問されたり犯されてはいない。心はともかく、体力を消耗しているわけではない。自然と正座になった。
「瀬田さん。食べておかないと、明日一日さえ乗り切れないかもしれなくてよ」

初めて、弓子が恵に語りかけた。二学年上の最上級生なのは華江と同じだが、婚約者がいるという恵の先入観のせいか、ずっと大人びて見える。しかし、彼女の言葉も恵の上を素通りするだけだった。

「気分が悪いんです。今、なにか口に入れたら戻してしまいます」

口に入れるというみずからの言葉で、紗良が三人に口淫を強いられていた情景を思い出してしまい、ほんとうに吐き気がしてきた。

「ごめん。ちょっと失礼するよ」

腹這いのまま飯粒ひとつ残さず盆を空にした華江が、盆を差し入れ口近くまで押し戻してから――膝を立て、大きく脚を広げて釣り合いをとりながら立ち上がった。

はしたない挙措――と、普段の感覚で考えてしまって、恵は自嘲したのだが。

華江は筵が敷かれていない側の隅へ行って、そこに置かれている箱の蓋を後ろ手で開けた。そこに座ると――ジョロジョロロロと、小さな水音を立て始めた。

（まあ……？！）

同房者に見られながら用を足さなくてはならないのだと知って、恵は頬が火照った。

（でも、手を使えなくて……跡始末は、どうするのかしら？）

答えはすぐにわかった。華江はそのまま立ち上がって、箱の蓋を締めたのだった。垂れ流しも同然。犯罪者は人間扱いされないのだと、あらためて思い知るのだった。

華江は筵の上に横座りにうずくまった。うなだれて目を閉じて、そのまま動かない。

やがて――手押し車の微かな軋みが聞こえてきて。すぐに、ガチャガチャと食器を片付ける音が響き始めた。

「丼、皿、湯飲み、箸。よろしい」
盆のひとつずつを確認する看守の声が、そこに重なる。箸の一本が脱走の武器にもなるし、自害の得物にもなる――とは、これも恵には思いもよらないことだ。
男の雑居房、女の雑居房。そして男子思想犯の雑居房が片付けられてから、最後に女子思想犯の房。
「なんだ、手付かずか。二千六番だな。食欲が無いのか」
「……はい」
叱られるのか。それとも六尺棒で敲かれるのかと怯えた恵だったが、看守は何も言わなかった。
「丼、皿、湯飲み。よろしい」
食事が下げられて、空になった二つの盆も同じ手順で回収されて。押し車の音が聞こえなくなるとすぐに、廊下の明かりが消された。
それが、一日の終わりだった。あとには、明日への恐怖に圧しひしがれる夜が、延々と続くのだった。

早い時刻に消灯されて後の留置場は静まり返っている。本館のほうからは、勾引された酔っ払いの大声や警官の叱責、何事かを訴えて駆け込む人の気配などが伝わってくる。やがて、男の雑居房から鼾も聞こえだした。そして、看守の詰所から漏れるわずかな明かりも消えて、留置場は闇に沈む。
ぐらりと身体が揺れて、恵はハッと目を覚ました。正座したまま、転寝(うたたね)していたらしい。

今すぐにでも死んでしまいたいほどの慙愧と、明日の取り調べ（つまり拷問）への圧倒的な恐怖とに圧しひしがれて――眠るというよりも、精神が死んでいたのかもしれない。

ふと気づくと、闇の中にかすかな蠢きがあった。

「稲枝先輩……？」

「気づかってくださって、ありがとう」

夕食のことを言っているのだろう。

「瀬田……恵さんでしたわね。あなたは、なんの容疑で捕まったの？」

こんな目に遭っていながらも、紗良先輩も女の子なんだなと――恵は仄かな親近感を覚えた。生涯残るだろう傷を負わされ、女としてこれ以上はない（としか、恵には思えない）ほどの辱めを受けても、それでも他人の打ち明け話に関心があるなんて。

恵はユリとの関係には一切触れずに、自分の軽はずみな興味でアカ本を隠し持っていた――そういうふうに話を略した。

「その本をどうやって手に入れたのか、誰からもらったのか。それを厳しく追及されるでしょうね。脅すつもりはないのですけれど……他の二人みたいな手心は加えてもらえないかもしれませんね」

あれで手心――という言葉は飲み込んだ。紗良への拷問に比べれば、まだしも寛容な取り扱いだったかもしれない。

「でも……山崎先輩も河瀬先輩も、あの……つまり……操を穢されました」

「その方の担当官に、ね」

紗良の口調に、恵は微妙な響きを聴き取った。

「わたしみたいに誰彼かまわず、ありとあらゆる部分を辱められたのとは……訳が違うわ。あなたはどうなるか……青谷とかいう新顔が担当についたわね。望みはあると思います。それを希望と考えるか絶望と考えるかは、あなた次第ですけれど」
「あの……どういう意味でしょうか」
紗良は、すぐには返事をしなかった。もぞもぞと身体を動かすのが、闇の中でその輪郭だけ見えた。それまでよりもずっと小さなささやき声が、かろうじて恵の耳に届いた。
「わたしが捕まって一週間くらいに、二十歳くらいの女性が連れて来られて……四月の終わりには、あなたと同じくらいの娘も。二人とも、半月と経たないうちに、言いがかりめいた罪を認めさせられて……姿を消しました。起訴されて別の場所へ移されたのかもしれませんけれど……担当だった二人の刑事も相前後して部署替えとかで取調室には姿を見せなくなりました」
「……？」
恵には、まだ話が見えない。
「二か月半も責められていると、刑事たちの与太話も色々と耳にします。大岩という刑事がいたでしょう。河瀬さんを担当している中年の」
顔は思い出せなかったが、弓子を組み敷き怒張を突き立てて激しく前後に衝き動かしている、ゴツゴツした尻の形は、はっきりと覚えている。
「あの人は、特高課に配属されて半年ほどで、奥様に離縁されています。正確には、奥様の父上が二人の仲を裂いたのですけれど。理由は――こんなことを公言したら、それだけで捕まってしまいますけれど、特高刑事の妻だなんて、世間様に後ろ指をさされかねませ

んから」
むくり――と、人の起き上がる気配があった。
「だれが、あんなやつになびいたりするもんか」
華江だった。
「そういうことなのです」
紗良が断定したが、恵にはなにかどういうことなのか、さっぱりだった。
「大岩も乃木も、三十歳を過ぎているのに独身です。先に自白した二人を担当していた刑事も、そうでした。青谷という人も、そうではないでしょうか」
「弓子は、絶対に浩二さんを裏切ったりしません」
恵はその言葉を聞いて、とんでもない構図が頭に浮かんだ。
庶民に恐れられているだけでなく、蛇蝎の如く嫌われている特高警察官。そんな男の許へ可愛い娘を嫁にやろうという親が、いるはずもない。
そして。特高警察にしょっ引かれた娘に、まともな縁談が来るわけもない。
割れ鍋に綴じ蓋。およそ考えられる限り最低最悪の意味を帯びて、その諺が脳裡に浮かんだ。
それなら、それで構いはしない。恵は、捨て鉢に思う。
二年後に女学院を卒業して、しばらくは花嫁修業に勤しんで、瀬田の家格にふさわしい婿を迎える。そんな将来は、木っ端微塵に砕け散った。警察官なら、よほどの不始末をしでかさない限りは馘首もされない。生き恥を晒した娘が人並みの幸せを得るには、他に道はなさそうだった。夫となる男性に最初から途方もない負い目を持ってしまうけれど、ど

のみち、妻は夫に服従するものだから――たとえ夫が我儘で横暴な人格だったとしても、負い目があれば逆らおうなんて不遜な想いを抱かずに済む。
「今の話は、取り調べのときにはおくびにも出してはいけませんよ」
いっそう声をひそめて、紗良が分別くさくささやいた。
「男性は、プライドとエゴの塊りです。まして、虎の威を借る特高刑事です。企みを見透かされたと知ったら――わたしと同じように扱われるかもしれません」
「それだったら……いえ、わかりました」
濡れ衣を白状させるなんて手間を掛けずに、嫁にならなければ刑務所へぶち込んでやると脅せば済むことなのに――そう思ったのだけれど、刑務所へ送るには自白が必要なのだと、すぐに気づいたのだった。
そして、『共犯者』をでっちあげられたら、つぎはその娘が新たな生贄にされる。
そういった筋書きを透かし見て恵は、捨て鉢な希望すらも打ち砕かれた。恵の罪は、濡れ衣ではない。そしてユリはでっちあげの『共犯者』どころか、真正の『主犯』だった。
もしも、あたしが白状してしまえば、ユリお姉様は主義者の組織について知る限りを白状するまで拷問されて……治安維持法は死刑まである。もしも死刑に値する罪ではないとしても、紗良先輩と同じように責め殺されるに決まっている。ほんとうに自分が青谷の妻と目されているのなら、殺されることまではないだろう。たとえ紗良先輩より非道く拷問されても、絶対にお姉様を殺させたりはしない……
恵は悲壮な決意を固めたのだった。